

## 平面類型から見た住様式の動向に関する研究(1)

千葉大学 服部研究室

## 目次

- § 1. 住様式の捉え方
    - 1. 多様性の中の住様式
    - 2. 理想と住様式
  - § 2 平面類型の展開
    - 1. 類型化方法と住様式
    - 2. 住様式の動向と新しい類型化
  - § 3 理想の住居
    - 1. 分析・考察の方針
    - 2. 調査対象の基本的展性
    - 3. 住い方の実態と理想
    - 4. まとめ
  - § 4 伝統的住様式
    - 1. 伝統の概念
    - 2. 床様式の動向
    - 3. 平面型の理想
    - 4. 続間型住宅の実態
    - 5. まとめ
  - § 5 残された問題
    - 1. 住宅地のレベルでの住様式
    - 2. その他
- 付 参考文献

## § 1 住様式の捉え方

## 1. 多様性の中の住様式

住空間と住生活との対応は、多くの制約や変化する条件のために、非常に多くの要因を含んだ動的な関係であり、満足のいくものでない場合は、居住者のより良い対応を志向した、解決への契機を内在することになる。

この関係を、社会的、地域的に展望する時、一定の同種のもの観察される場合、住様式が形成されているといえる。安定した社会や自律した地域では、特に過去に多いが、住様式の顕在化が起る。現代では、変化が早く、条件が多様であるため、拡散した状況があり、住様式が分節化していないといわれる。

住様式は、住空間－住居と住生活との関係の様式である。住居の一定の特性と住生活の一定の特性との対応関

係である。

住様式の多様性は、階層性によるもの（第一次の多様性）と個別性によるもの（第二次の多様性）があり、現代では、前者が流動化ないし潜在し、後者が顕在化している。このことは、住居にも生活にもあてはめられる。住居は、入手に関し多くの困難があることや、合理化された生産・供給の制約のために、居住者の任意識が誘導されているきらいがあり、住様式が、外的な要因に左右されている面が、出てきているように思われる。工業化住宅の台頭や住宅不動産による集合住宅（マンション）ブームはその例である。

生活の面でも、都市生活が、画一化され、第一次の多様性は消え、趣味的、個性的な選択による差異が、見られるようになってきていると思われる。

住様式の動向を考える際、住居の側の技術的条件や流通的条件を含めて、総合的に見通すことが大切である。過去の時代と異なり、技術や流通の展開が、より支配的であるからである。人々の主体的な住様式への志向も、生産や供給の上でしか自由でないということである。しかし、技術などの条件は、予想がむづかしいこともあるが、そこから住様式の動向を見出すのは、本義ではない。やはり、居住者側の志向を第一義に据えるべきであろう。

居住者側の要因には、自然的要素、社会・経済的要素および意識・規範的要素が考えられる。最初の自然的要素は、主に人間の生物としての特性にかかわるもので、例えば家族構成・年齢構成などがある。社会・経済的要素は、いわゆる階層性にかかわるもので、例えば、収入・職業・学歴などがある。意識・規範的要素は、居住者の個人的・社会的意識にかかわるもので、好み・趣味や伝統、しきたり意識などがあげられる。

第一次の多様性が、流動化した段階では、主に社会・経済的要素よりも、自然的要素や意識・規範的要素からの要因が重要になる。人々は、ある程度の条件が満足されるならば、その自然的要因と意識・規範的要因において、住居および生活と住居との対応にかかわり、ある時は、その要因において向上への欲求を持つと想定しうる。

\* 服部研：住要求から見た独立住宅の類型化に関する研究,1979  
新住宅普及会

例えば、家族構成と住居との対応は、居住者の基本的命題である。この事は、職業と住居との対応と比較し、どちらが基本的かどうか疑問を持ってみれば、明らかである。

また、伝統的な住居への欲求を持つ居住者にとって、マンションの生活は、不断の順応への緊張、あるいは否定を強制されることになり、やはり向上への欲求の契機となる。

本論文では、現代の住居・住生活の多様性の考察から、自然的要因としての家族の特徴、意識・規範的要因としての伝統への関心（逆に近代化の意志としても良い）の2軸を設定して展開することにした。

## 2 理想と住様式

不満足な住居と生活との関係を契機とする、住居改良、変改、変更の欲求は、どこに向いているだろうか。不満から生ずる住要求は、基本的には必要な空間を求めるといふ意味である。例えば、子供が生まれた時、生活用品が増えた時、空間が必要となる。

住要求は、単なる必要性からだけでなく、住居の向上にかかわる側面を含んでいる。これは、機能的には、必要な空間を持っているが、例えば好みが合わない時、もっと広い空間を欲しい時などグレード・アップにかかわる内容である。いわば、住要求というより住欲求といった方が妥当かもしれないものである。この欲求は、現実性の程度によって、理想的なものから当面の目標という意味の望ましいものまで、広い範囲に及んでいる。

必要からくる住要求、より望ましいものを求める欲求と理想と3段階の構造を見出すことができる。

住様式の動向は、この3段階に及ぶ住要求に推進された流れである。もちろん、生産、供給などの体制の条件もあるが、あるべき方向というニュアンスでは、居住者の要求や欲求からの流れになるべきであろう。

必要を契機とした住要求は、居住者の住生活の体験からくるものであり、現実に根ざした基本的なものである。それに対し、望ましい空間への要求や理想は、日常の体験からというよりは、見聞などによって形成されるものである。住居に関する新しい情報は、居住者の体験に基づく住居観を強化することもあるが、別な局面へ誘導するものである。もちろん、急激な住居観の変化は、あまり例がない。しかし、住居の近代化に関する多くの歴史的事実は、緩やかな変化の存在を証明している。必要性を要因とする現実の要求は、しばしば保守的で微調整的展開を示すものである。これに対し、理想は、必ずしもではないが、社会的・歴史的な変化にかかわる可能性がある。

住要求の形成に対する情報の役割は、現実の住要求よりも理想などの欲求に関係している。

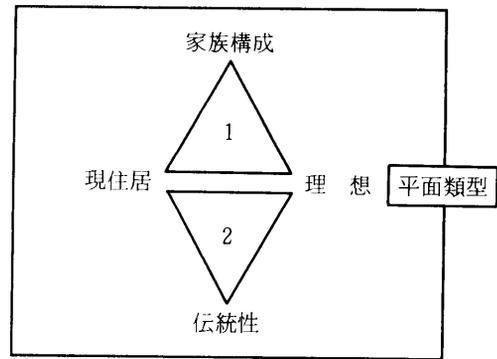


図1-1 分析のフレーム

居住者の持つ住居に関する情報は、現住居に関するものを基本として、その他に多くのメディアからの情報で構成されると考えられる。理想が、現住居とどのような関係となるかは、この情報によって左右される。理想が、現住居のあり方に引きつられるような場合、新しい情報がないとか、理想を持っていないなどの悪い状態にあるわけだし、現住居から見て、あまりかけはなれてない適度な距離の理想であれば、良い状態で、住様式の、居住者による主体的な流れが形成されると見ることができる。もちろん、現住居と理想が隔絶する場合も考えられるが、これは身分制の社会のようなものを前提としないと存在しない。

本論文では、先に述べた、「家族」「伝統」の軸に対し現住居と理想を共通軸とし、住様式の動向について考察した。

すなわち、考察は、以下の2つの観点から行なわれた。

1. 家族構成の条件が、住居のあり方(主に平面類型)にどのような関連を持つかについて、現住居、理想の住居に関する調査から分析する(第3章)
2. 伝統的な住居の特徴(平面類型、床様式など)について、現住居、理想の住居に関する調査からその動向を分析・予測する。(第4章)

これから、多様性の中の新しい住様式の動向について考察を行う。(第5章)

## § 2 平面類型の展開

### 1. 類型化方法と住様式

仮に、明治の和洋折衷住宅を類型化するとしたら、どのような方法が考えられるだろうか。もちろん、生産や力学的な立場でなく、住い方研究の立場からである。

一例として、西山卯三の方法に着目すると、取りあげられた空間は、通路、接客(和・洋の区別)、接客一主人、家族、家事、書生・執事となっている。明治時代の家族における家父長の権力、住生活の特徴(接客方法、女中による家事労働、書生の存在)などに対応した選択

である。その結果は、ループ型、放射型、うら・おもて型、重ね合せ型と4種類になっており、通路形式に着目した前二者、領域構成に着目したうら・おもて型などである。(西山, 日本のすまいⅡ, 図 51 から)

必ずしも研究的なものではないが、様式的な把握も考えられる。例えば、生活改善同盟会(1919)による「実生活の建直し」においては、中庭を中心としてその周囲に各室を配置する方法、広間を中心としてその周囲に各室を配置する方法、廊下をもって各室を連絡する方法などを取りあげている。これは、住居形式といったもので、必ずしも、住い方との対応が厳密でなく、時代の住様式を表現していない。

過去の時代の住様式に対応した類型化の方法として、秀れた例が、やはり西山卯三によって示されている。ひとつは、図2-1に示す「中流住宅」の類型化、もうひとつは、図2-2「公庫住宅」の類型化である。(とも

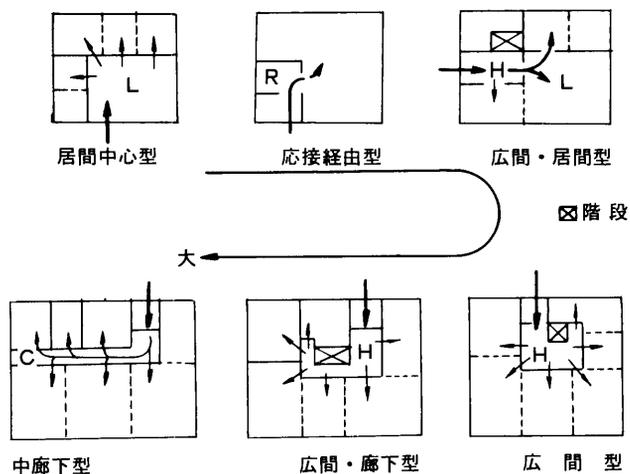


図2-1 西山卯三による中流住宅の平面構成のパターン

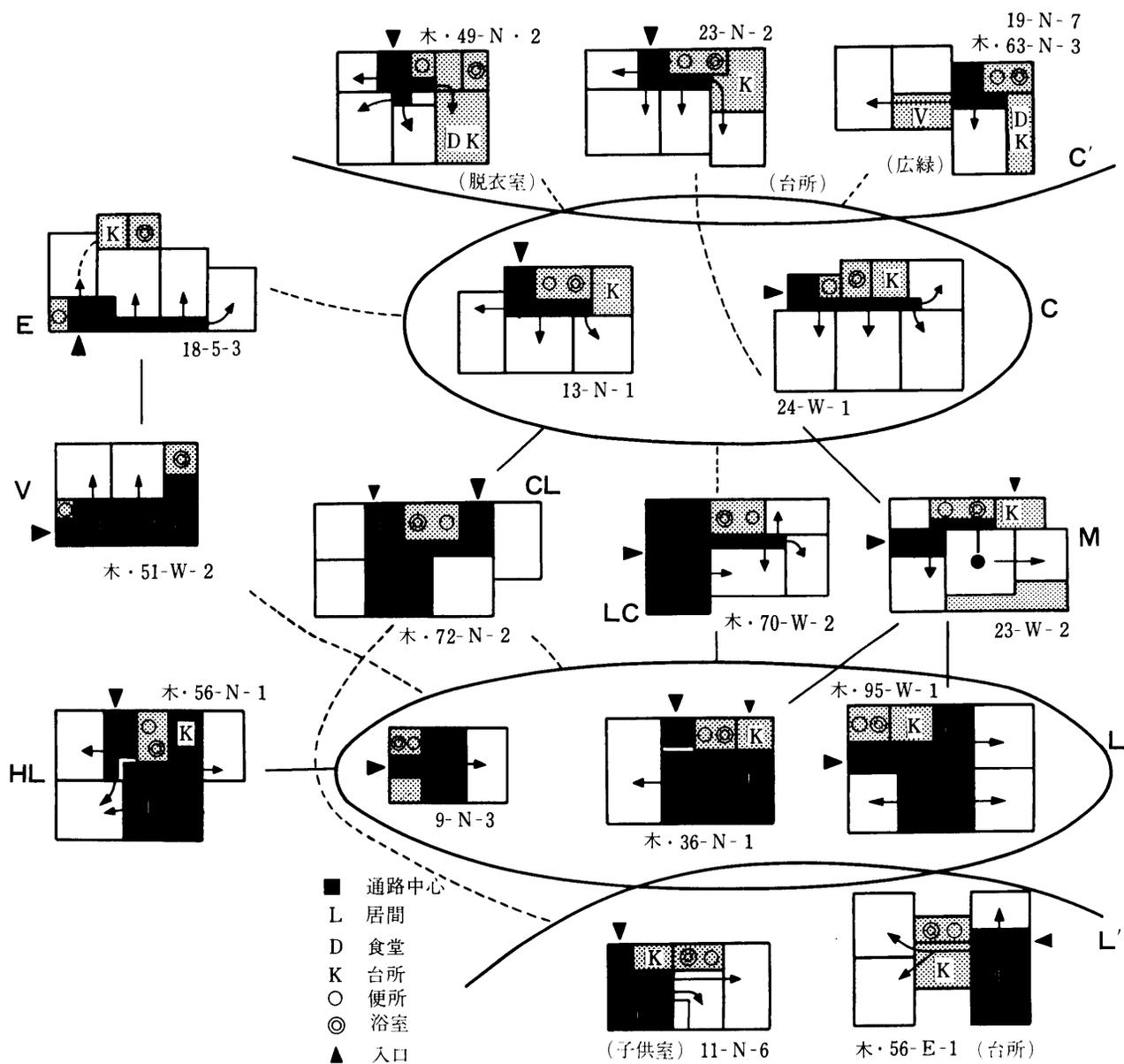


図2-2 西山卯三による「公庫標準住宅の平面タイプ図」

に、日本のすまいⅡから引用)

西山は、長屋型住宅に対して、その間口、奥行方向の分割数による類型化方法、都市住宅の敷地平面型の類型化方法など、国民住居の提案などで類型化に関する成果や応用を示している。図2-1、2-2は、そのうちでも、独立住宅に関するもので、現代の住様式に通じると考えられるものである。

中流住宅は、当時のいわゆる庶民住宅ではないが、大正の居間の移入・普及を前提にした類型となっており、現代との関連を見ることができる。後に、現代の独立住宅の実態を述べるが、当時の居間は、現代のDKなどととも家事労働の能率化とだんらんの普及に対応した居間ではなく、接客空間としての意味が大きかったといわれる。また、応接経由型での応接室、広間型などでの広間は、現代の住宅では、あまり見られないものである。しかし、図2-1の成果は、独立住宅の捉え方としては、基本的である。

図2-2の公庫標準住宅の例は、中流住宅の例と良く似ているが、KとLの関係に着眼があるように、新しい戦後の住生活に対応したものである。現代では、E、Vはほとんどないもので、縁側・広縁の存在と対応している。以上の例から知れるように、平面型の類型化は、時代の住様式と良く対応している。住様式との対応がなければ、住い方との関連を見出せないし、また類型という総合的イメージを与えるものとしては、適切でない。

## 2. 住様式の動向と新しい類型化

現代の住居のあり方から住様式の類型化 - ここでは、主に、平面型の類型化をはかる際、次のような2つの考え方があり。現状の住い方との対応を重視する考え方と、住い方の時間的変化(過去との関連、将来への変化)を配慮し、変化に関連する特徴を組込む考え方である。

西山においても、現代の研究者 - 例えば、足立、住田(昭和54年度建築学会大会論文梗概集、5221, 5235)、も含め、前者の現在でのリアリティを重視している。また、(例えば、昭和54年建築学会大会論文梗概集、5224)のように、居住者の姿勢から、主体の判断による体の類型化ともいべき型もあるが、物としての住居の特徴を、時間系列に見ようとしているものではない。現状の表現でなく、動きの表現を、類型化の基本とすることは、住様式の動向把握にとって、もっとも重要なことである。そのためは、過去から現在、未来の流れの契機となるエネルギーの表現を、住様式の特徴の中に見出さねばならない。

既に見たように、住要求における必要、欲求、理想の3段階の力は、住様式の変化のエネルギーである。この一般により良いものを求める力は、類型化の方法として、単なる分類でなく、評価を前提にしたものを採用すべき

ことを示唆する。鈴木成文は、圧縮型の住宅という分類によって、ある意味で評価をした類型(建築学会編、建築設計資料集-生活1979.丸善)を提案しているが、そのようなものが求められるということである。

次に、理想に関する考察で述べたように、過去における洋風住宅の移入・定着における情報の意味も配慮せねばならない。この事は、日本の住宅の、洋風化にはじまる緩やかな近代化の流れを表現するということでもある。近代的なものと伝統的なものの関係として、類型化がなされなければならない。

既に、服部研究室で試みた類型化提案があるが(住要求から見た独立住宅の類型化に関する研究、1979、新住宅普及会)、以上を前提に、より厳密にしたものを以下に提案・説明する。

### i 平面型の解釈と類型化

平面型は、単位になる空間(居室など)・単位の空間の群(公室群・1階部分・2階部分など)と、それらを連絡する動線の空間(通路・ホール・居室)とに分解して考えることができる。押入や造付の家具、設備スペース、勝手口などは、補助的な空間として考えると、多くの平面型が、単純な構造として解釈することができるようになる。これらの部分の形態は、生活の要求の表われであり、その実現のされ方を良く示す。

各部分の床仕様と内部連絡の開口部仕様・寸法によって部分を分類し、その組合せとして、平面の類型化をはかることができる。部分の規模は、組合せの類型とほぼ一定の対応が見られるので、取りあげなくてもよくなる。また、組合せに際し、2階部分は、ほとんど同種の、個室の群として計画されているので、1階のみに着目すればよい。

すなわち、このような類型には、次のような特徴が備わることになる。

- ・ 住要求との対応
- ・ 平面の幾何学的特徴との対応
- ・ 空間構成の評価
- ・ 近代化型住宅と伝統型住宅の対比

空間構成の評価とは、主に空間の連絡関係を通して、平面型を評価するものである。具体的には、平面型を、余裕のあるもの、標準的なものおよび貧乏なレベルにあるものに大別するようにしている。後に説明するように、DKや私室を通り抜けてしか出入りできない部屋のあるDKホール型の平面や、長屋によく見られる、うなぎの寝床式の一列型は、一般に圧迫された貧乏な平面である。他の平面型は、標準あるいは余裕のあるものとしている。

近代化と伝統との関連では、伝統的住宅の特徴として、床の間、和室、縁側、広間などの部分を取りあげる考えもあるが、より全体にかかわる特色として、続間に着目した。調査によると、平屋建といったより全体的な、伝

統的特徴は、もはや伝統としては考えらず、最大の特徴として、統間が見出された。

統間は、過去の大規模で、床の間、縁側を付帯したものから、小規模なもの、一部変形したものまで、多くの種類が考えられる。そこで、類型化の前提として、統間の和洋の区別、続き方の種類（開口寸法）、統間の数を取上げ、いわゆる統間と、類似のものとして、準統間（A-洋室中心、B-和室中心）を分けることにした。これによって、伝統住宅か近代住宅の区別が可能である。近代化型住宅の平面型は、通路形式（主動線の形態）に着目した。既に西山による類型においても見たように、主動線は、廊下式、ホール式が主に考えられるが、空間の連絡関係が、圧縮されるとループ状のものがでてくる。その他、貧困なレベルの住宅では、DKやKの通過、私室の通過による動線が考えられる。以上、1階の形態（公室および私室における統間のあり方から見た）と主動線の形態から、図2-3、2-5に示す類型を得る。表2-2に、その

表2-1 統間の分類の考え方

1. 2室間のふすま、ドア等の内部開口の長さ、室の和・洋の組合せから、統間であるか否かを見る（K、DKなどは含まない）。

内部開口の長さ	和洋の組合せ	
	・和・和	和・洋/洋・洋
1間半以上	統間	準統間
1間半未満～1間以上	準統間	
1間未満～半間を超えるもの		統間でない
半間以下	統間でない	

2. 次に、統間の種々の組合せを以下のように分類する。

1階の形態の内容となるもの	統間の組合せ
統間2つ以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・統間が2つ以上</li> <li>・統間が1つ+準統間（和・和）</li> </ul>
統間1つ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・統間が1つ</li> <li>・統間が1つ+準統間（和・洋、洋・洋）</li> </ul>
準統間B（和室中心）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・準統間（和・和）</li> <li>・準統間（和・和）+準統間（和・和）</li> <li>・準統間（和・和）+準統間（和・洋）</li> </ul>
準統間A（洋室中心）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・準統間（和・洋、洋・洋）</li> <li>・準統間（洋・洋）+準統間（洋・洋）</li> <li>・準統間（洋・洋）+準統間（和・洋）</li> <li>・準統間（洋・洋）+準統間（和・和）</li> <li>・準統間（和・洋）+準統間（和・洋）</li> </ul>

注) 1.2.とも1階のみで判断する

基本展示と類型名のリストを示した。

類型相互は、図2-6のような関連となり、左から右に伝統性の残存を見ることができ、上から下に、主に標準から貧困へのレベルの変化を見ることができる。独立住宅との対応を見ると、図2-4のように、全体に感度よく配分される。

また、類型と住宅規模の対応も、図2-7に見るよう設定した、余裕から標準、貧困の段階とよく対応している。

表2-2 基本的属性と類型

(a)平面型	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余裕型</li> <li>・各室廊下アクセス型</li> <li>・Lホール型</li> <li>・DKホール型</li> <li>（DKホール型ループ）</li> <li>・統間型</li> <li>（統間型ループ）</li> <li>・伝統型</li> <li>・一列型</li> <li>・田舎住宅型</li> </ul>	1 2 3 4 (5) 6 (7) 8 9 10
これは1階の形態と[主動線の形態]との組合せで決まる		
(b) 1階の形態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余裕のある公室・私室群</li> <li>・統間なし</li> <li>・準統間A</li> <li>・準統間B</li> <li>・統間1つ</li> <li>・統間2つ以上</li> </ul>	1 2 3 4 5 6
(c)主動線の形態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・通路</li> <li>・ホール（L、茶）</li> <li>・ループ</li> <li>・DKまたはKを通過する</li> <li>・L・D・K以外の室を通過する</li> <li>・通路なし</li> </ul>	1 2 3 4 5 6

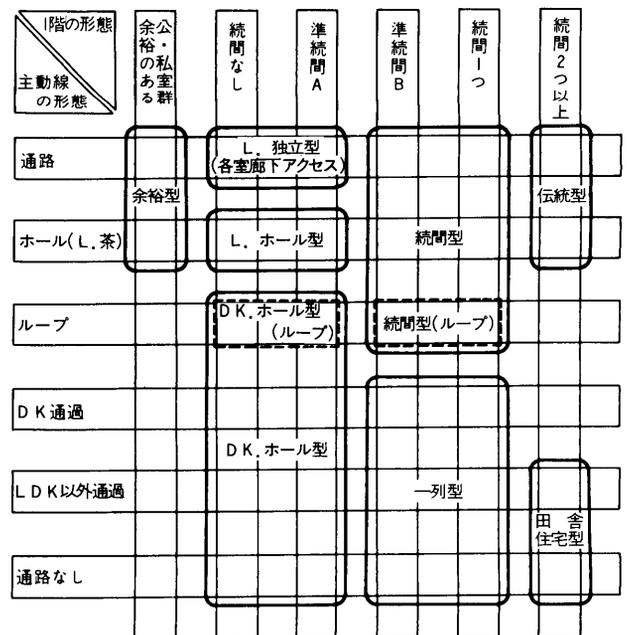


図2-3 平面型の分類

1階の形態 主動線の形態	余裕の ある群	各室廊下アクセス型				
		続間なし	準続間A	準続間B	続間一つ	続間2つ以上
通路	11 91.7	134 73.6	48 26.4	9 5.0	162 90.5	3 60.0
ホール(L,茶)	1 8.3	11 28.9	27 71.1	3 1.7	5 2.8	2 40.0
ループ		4 12.1	29 87.9	10 29.4	24 70.6	
DKまたはK通過		45 64.3	15 21.4	2 5.1	27 69.2	
L・D・K以外通過		1 1.4	1 1.4	4 10.3	3 7.6	2 33.3
通路なし		8 11.4	0	0	3 7.6	4 66.7

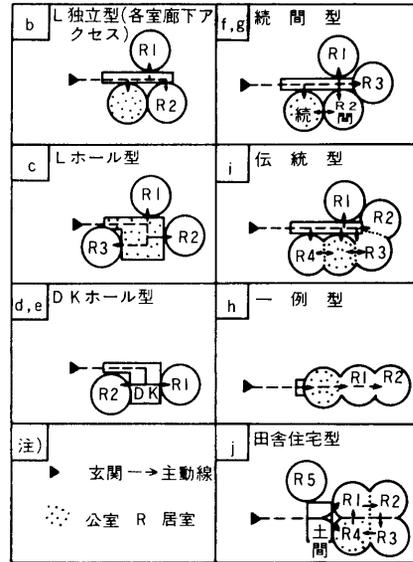


図 2-5 平面類型の図式

注) 1.  $\frac{134}{73.6}$  → 例数  
 $\frac{134}{73.6}$  → 各平面型内での比率(%)

2. 服部研1978調査(神奈川, 兵庫, 静岡, 秋田)の再集計

図 2-4 類型の分布

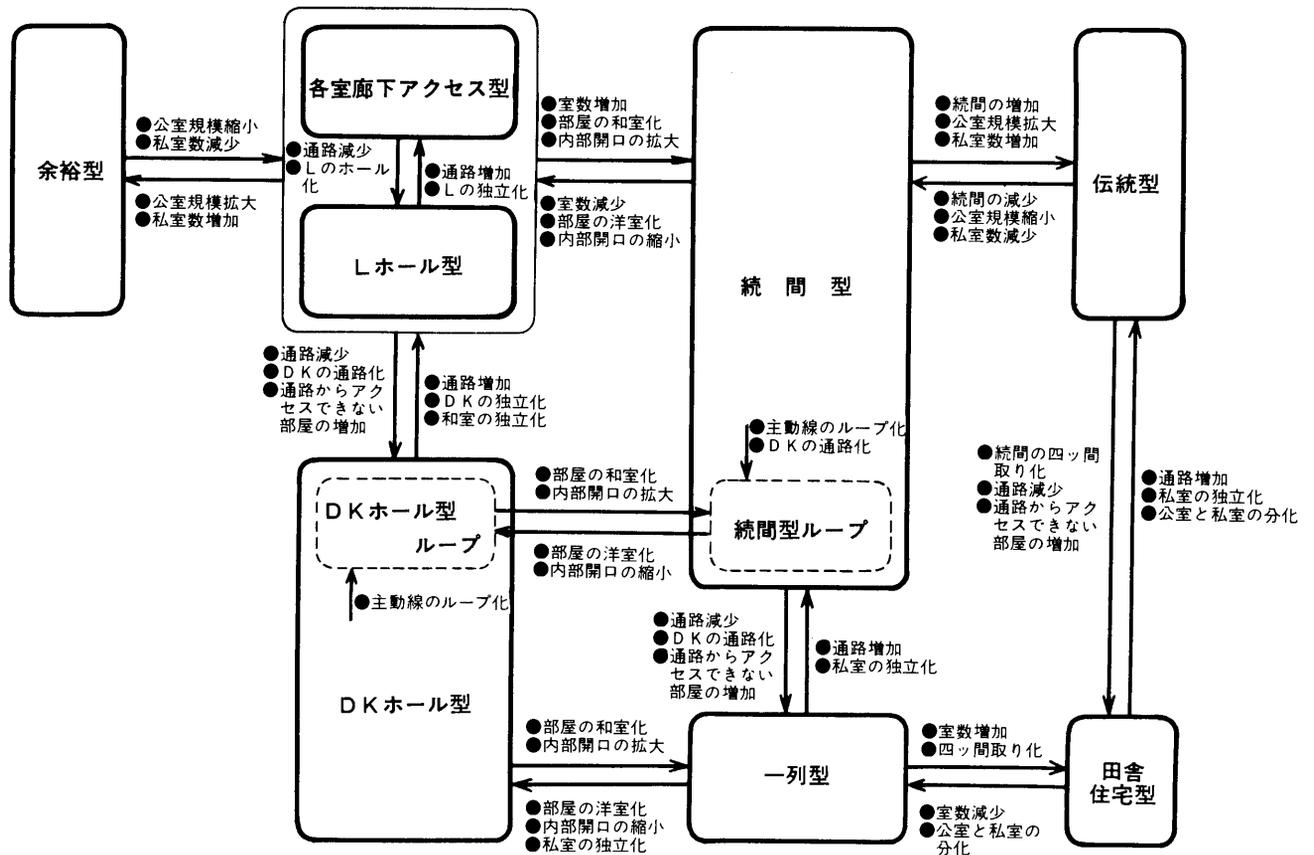
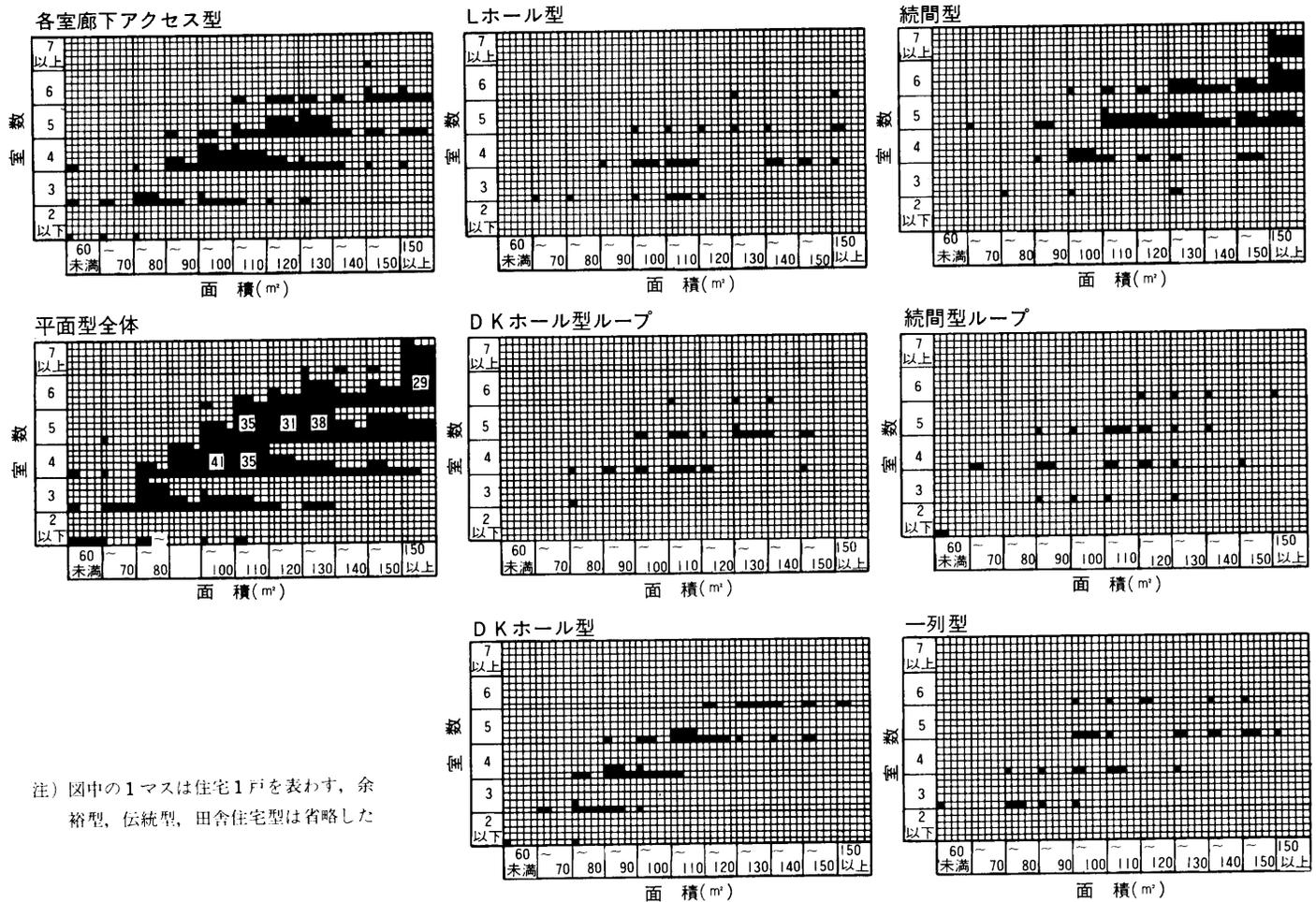


図 2-6 類型相互の関連



注) 図中の1マスは住宅1戸を表わす、余裕型、伝統型、田舎住宅型は省略した

図2-7 類型提案の領域と平面型との対応 (全地域)

iii 類型の特徴

- a) 余裕型-余裕のある公室群・私室群+通路・ホール  
以下に説明する、各室廊下アクセス型やLホール型に対応した型だが、公室群・私室群に明らかに余裕のある平面型である。
- b) 各室廊下アクセス型-続間なし・準続間A+通路  
独立性のある私室で構成され、主動線が通路(廊下、広間的廊下)によるもの、近代化した生活様式に対応しており、比較的豊かな平面型である。
- c) Lホール型-続間なし・準続間A+ホール  
私室の独立性はかなり高く、居間をホールとする主動線を持つ平面型である各室廊下アクセス型と同様、近代化した生活に対応する。

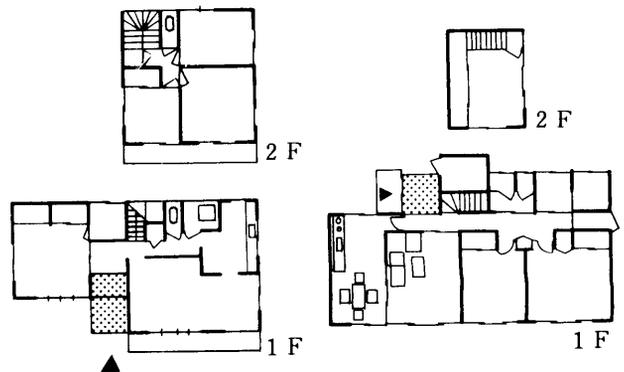


図2-9 各室廊下アクセス型の例(2)

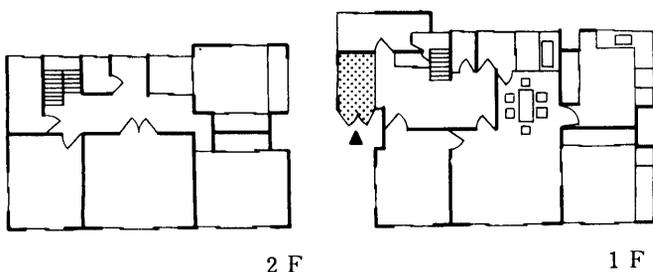


図2-8 余裕型の例

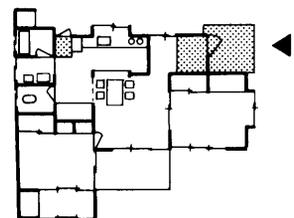


図2-10 L・ホール型の例

d) DKホール型 - 続間なし・準続間A+DK, 私室などの通過・通路なし

独立性のある私室もあるが, 主動線がDK・K, あるいは私室を通過する平面型で, 領域構成が混乱している。伝統性・近代性という以前にやや貧しさが感じられる。

e) DKホール型(ループ) - 続間なし・準続間A+ループ

DKホール型に準ずるが, 規模の小さい住宅で, 通路を圧縮する時生じる平面型

f) 続間型 - 続間1つ・準続間B+通路・ホール

続間があり, 通路やホールによる主動線を持つものである。続間という伝統的特徴を持ちながらも, 近代的なDKを付帯していることが多い。

g) 続間型(ループ) - 続間1つ・準続間B+ループ

続間型に準ずるが, 規模の小さい住宅で通路が圧縮されたものである。

h) 伝統型 - 2つ以上の続間+通路・ホール

続間型の大規模なもので, 公室群・私室群に余裕のある平面型である。これは, 書院造の伝統を, 良く残した型である。

i) 一列型 - 続間1つ・準続間B+DK, 私室などの通過・通路なし続間を持ち, 主動線がDK・K, あるいは私室を通過するために, 私室の独立性が, きわめて低い平面型である。DKホール型同様, 貧困なレベルのものが多い。

j) 田舎住宅型 - 2つ以上の続間+私室通過・通路なし

公・私室の境界があいまいで, 四ツ間取りの特徴を残しているものである。

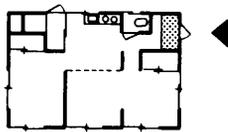


図2-11 DKホール型の例

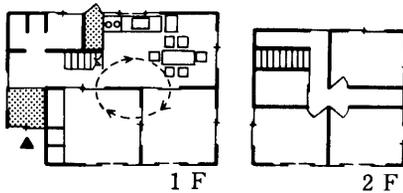


図2-12 DKホール型(ループ)の例

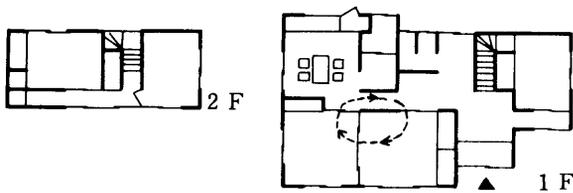


図2-14 続間型(ループ)の例

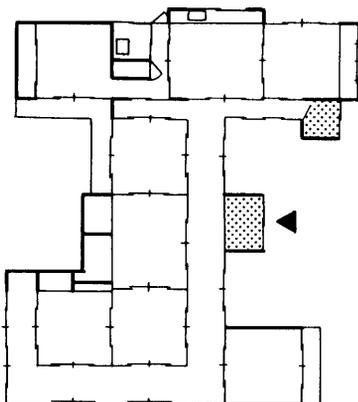


図2-15 伝統型の例

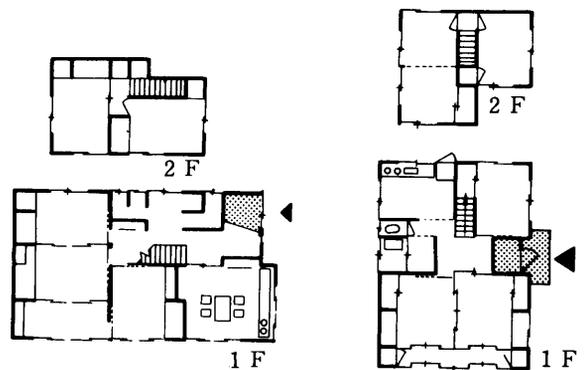


図2-13 続間型の例(2)



図2-16 一列型の例

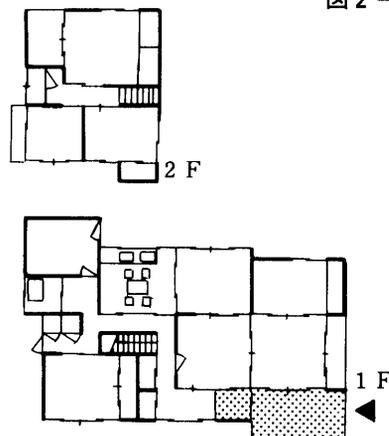


図2-17 田舎住宅型の例

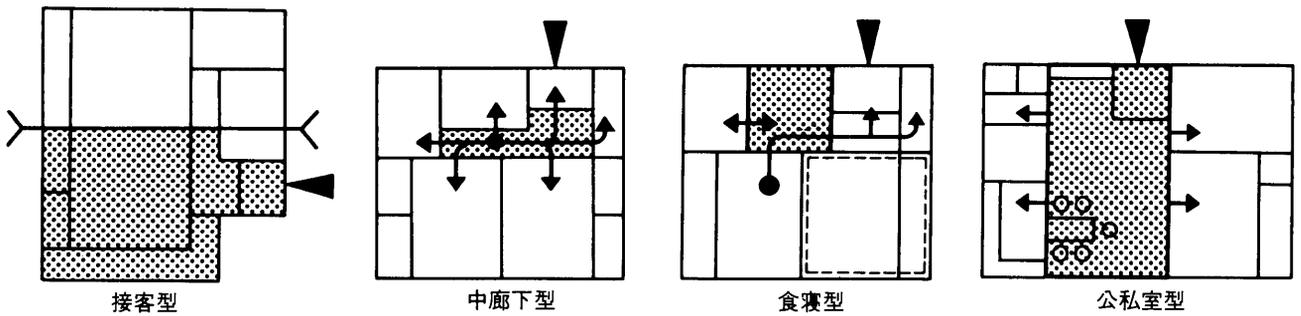


図 2-18 西山卯三による類型

IV 類型と住い方の対応

提案された類型は、近代的な生活に対応する型、あるいは伝統的な生活に対応するとか、生活への対応前提としている。それは、住要求の表われとして住居がある以上、単に幾何学的な特徴のみによって類型化を行なったとしても、生活との対応がまったくなくなることはないことから当然である。

しかし、厳密で、より詳細な意味で住生活の差を表現するような類型を、求めるのは、より困難だし、ここでこの類型化の主旨とは異なるものである。

西山卯三は、階層と住居、生活の相互の関係を類型として総合的に把握し、日本人の住居のあり方について展望を与えた際、より生活に対応させた類型を用いた。(図 2-18)

これは、先の西山による類型(図 2-1, 2-2)と異なり、生活の方の側と空間構成の側の両方の特徴を見ている。本論文では、しかし、最終的には、このような方向を求めているが、住生活の多様性を探ぐりその内容が十分明らかになるまで、生活の側の組込は現状どまりとした。

§ 3 理想の住居

1. 分析・考察の方針

この章では、主に家族の条件と、現住居、理想のあり方との関連を考察し、家族の条件が、住居をどのように規定していくかを探るものである。

その具体的な方針としては、次のふたつを前提にした、

- ・ 家族の条件として、家族型・家族周期を取りあげ、家族の成長段階と現住居、理想のあり方との対応を見る。
- ・ 現住居のあり方、理想のあり方として、住戸規模、平面型、公・私室構成、室規模に着目する。(平面型の理想は、次章で詳説する)

分析・考察の資料として、集合住宅、独立住宅共通にするため、多摩ニュータウン内の公共住宅と周辺の独立住宅を対象にしたアンケート調査(留置回収式)の結果を用いることとした。

表 3-1, 3-2, 図 3-1 に調査対象の概要、典型的な平面型を示した。

表 3-1 家族周期からみた家族の型(住宅型別)

家族周期		都3DK	公社2DK	公社3DK	公社分譲3DK	公社分譲3LDK	団地合計	平山台	北野台	八王子	滝山台	戸建合計
成長家族	婦令40才以下 子なし	1	17	9	9	5	41	3	2	0	1	6
	" 長子10才以下	64	65	70	53	43	295	28	36	35	30	129
	上記の複合家族	1	2	0	1	2	6	0	1	0	0	1
安定家族	婦令40才以下長子11才以上	8	1	4	13	13	39	20	14	17	4	55
	婦令41才~60才 子なし	0	1	3	7	0	11	2	1	3	2	8
	" 子あり	3	3	8	16	26	56	26	22	23	7	78
上記の複合家族	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
衰退家族	婦令61才以上	1	0	0	0	0	1	1	3	1	0	5
不明等		12	9	3	4	8	36	11	20	16	10	57
合計		90	98	97	103	97	485	91	99	95	54	339

表 3-2 調査対象の概要

	サンプル数		入居新築 時期	調査地
	配布数	回収数		
都営 3DK (賃貸)	120	90	S. 50 ~ 53	多摩ニュータウン(T.N.) 落合・豊ヶ丘地区
公社 2DK (賃貸)	115	99	S. 51 ~ 53	T.N. 落合地区
公社 3DK (賃貸)	120	96	S. 50, 51	"
公社 3DK (分譲)	115	104	S. 51, 52	"
公社 3LDK (分譲)	120	97	S. 50, 51	T.N. 松ヶ谷, 鹿島地区
平山台	120	90	S. 51 ~ 53	日野市平山
北野台	120	104	S. 52, 53	八王子市高嶺町
八王子	120	90	S. 48 ~ 53	" 谷野町
滝山台	54	54	S. 51 ~ 53	" 滝山町

3. 調査対象の基本的属性

1) 家族型

C<sub>0</sub> (夫婦のみで 40 才未満の妻), C<sub>b</sub> (長子 0 ~ 2 才)  
 といった若い家族は、団地でも **2DK** (公社 2DK

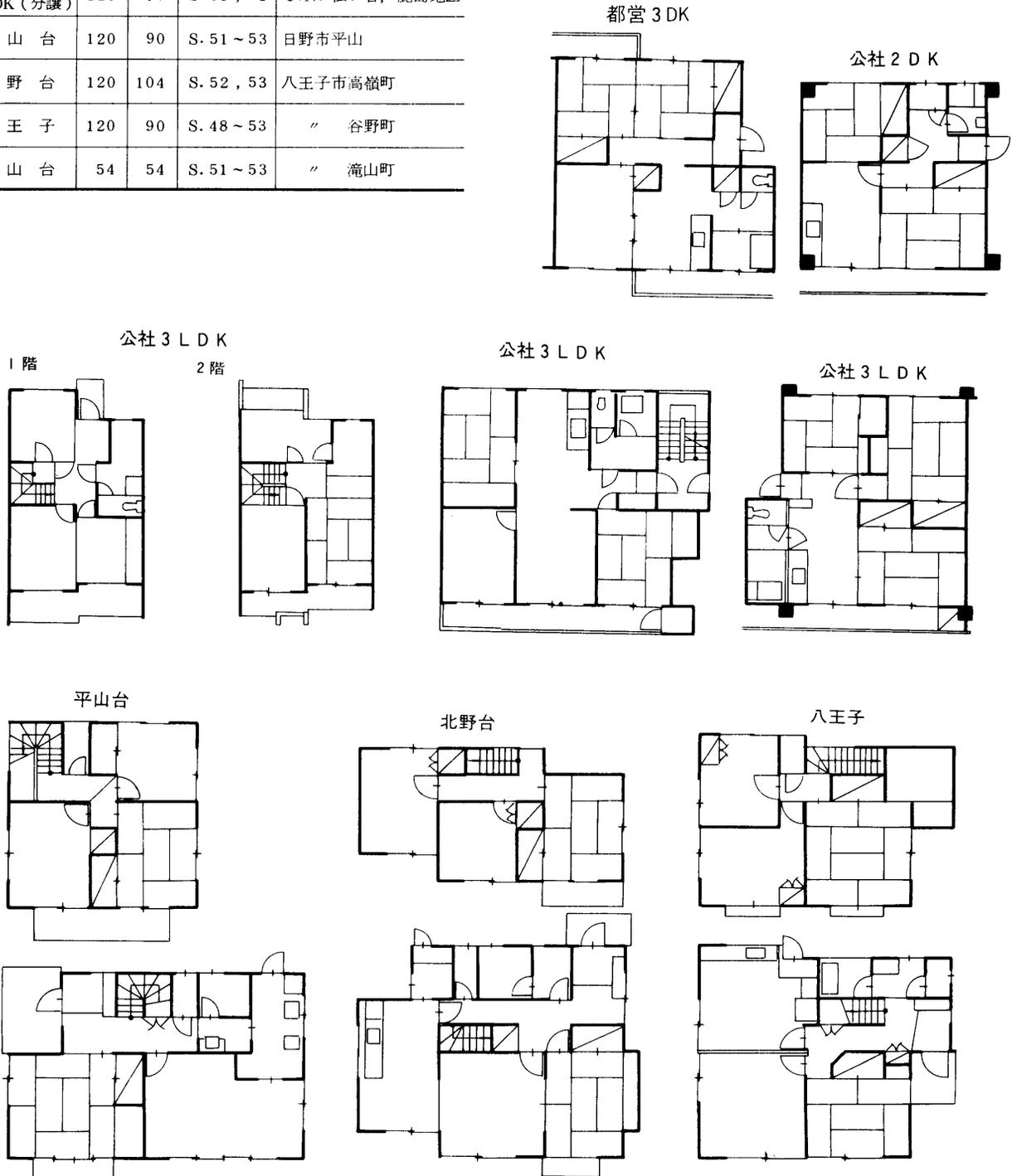


図 3-1 典型的な平面型

賃貸)や 3DK(賃) (公社3DK賃貸)の居住者が多く、Ck<sub>3</sub>(長子12~14才)~Ck<sub>5</sub>(長子18才以上)など年齢層の高い家族は、3LDK (公社3LDK分譲)や 平山台 などの戸建住宅の居住者が多くなる。Ci(長子3~5才)Ck<sub>1</sub>(長子6~8才)といった層の家族はどの住宅のタイプにも分散している。CC BCといった年齢層の高い家族は 北野台 , 八王子 に多いが、Ciは団地と滝山台に多く、Ck<sub>1</sub>は 3LDK, 平山台 北野台 , 八王子 の千住宅の居住者に多い。

### 2) 年間収入

収入の低い方は団地居住者で、300万までは 都3DK ((都営3DK賃)の居住者の比率が高く(約1/2), 300万~400万では 2DK, 3DK(賃) の居住者が多い。400万~500万では前者の3住宅以外の居住者に分散しているが、500万以上では 3LDK, 八王子, 平山台, 北野台 の居住者の比率が高い。

### 3) 家族人数

もっとも多いのは4人家族で(全体の約1/2), 次いで多いのは3人家族(全体の約1/4)であり、5人家族との合計は全体の9割となる。

3人家族、2人家族は 2DK, 3DK(賃), 3DK(分) の居住者が、5人家族は 3LDK, および戸建の居住者が多い。4人家族は全体にまんべんなく分散している。

平均家族人数は全てで約3.7人で、住宅別では 2DK が3.0人、3DK(分) が3.4人、3DK(賃) が3.5人で他はほぼ4人である。

## 4. 住い方の実態と理想

### 1) 公室の生活像(くつろぐ部屋の生活)

ここでは、くつろぐ部屋で「だんらん」以外の次の3つの生活行為-①食事、②接客、③就寝-がなされる様子-行為の重複-から公室の生活像をみる。

2DK では、くつろぐ部屋を寝室としても使用するケースが多いのが特徴である。これは住宅規模は小さいが、その分、若い家族が多いことから、居室数が不足した結果とは考えられない。その室を接客に用いることも多いことから、居住条件のよい室(南向6帖)に公私行為を重複させて生活する居住者が少なくないことを示しているといえる。

3DK も 2DK 同様に若い家族(Co~Ck<sub>2</sub>)の割合が多い(約80%)。1室分だけ2DKより余裕があるためにくつろぎと接客のための部屋が確立するケースが多い(49.5%)。しかし成長した家族では、くつろぎの部屋が同時に食事の室である率が高い(30.8%)。3DKはDKを食事室とするのが普通であろうから、だんらん行為をDKで行うようにして、これまでの居間を寝室に

用途変更したものと考えられる。

3LDK や戸建の居住者では、くつろぎの部屋で就寝するなどの混乱はほとんど無いといってよい。また、

表3-3 家族型

型記号	家族型を区分している内容
Co-	子供のいない夫婦(主婦40才未満)
Cb	夫婦 + 長子 0~2才
Ci	" 3~5才
Ck <sub>1</sub>	" 6~8才
Ck <sub>2</sub>	" 9~11才
Ck <sub>3</sub>	" 12~14才
Ck <sub>4</sub>	" 15~17才
Ck <sub>5</sub>	" 18才以上
Co+	子供のいない夫婦(主婦40才以上)
CC	2世代夫婦
BC	" (上の世代が欠損)

表3-4 家族型(住宅型別)

住宅型 家族型	都営 3DK (賃)	公社 2DK (賃)	公社 3DK (賃)	公社 3DL (分譲)	公社 3LDK (分譲)	平山 台 (建売)	北野 台 (建売)	八王 子 (建売)	滝山 台 (分譲)	計
Co-	1	17	9	10	4	3	2	—	1	47
Cb	11	34	28	9	3	4	1	3	2	95
Ci	33	22	25	24	15	11	11	7	19	167
Ck <sub>1</sub>	14	9	6	16	16	9	19	16	6	111
Ck <sub>2</sub>	7	1	12	10	12	9	17	11	4	83
Ck <sub>3</sub>	5	1	2	4	19	19	13	11	3	77
Ck <sub>4</sub>	5	1	4	8	5	8	3	10	1	45
Ck <sub>5</sub>	—	2	4	11	13	13	14	12	6	75
Co+	1	1	3	7	—	3	3	4	2	24
CC	2	1	—	—	—	1	5	5	4	18
BC	6	2	3	—	5	8	13	10	5	52
計	85	91	96	99	92	88	101	89	53	794

(表3-3以外の家族型は省略した)

表3-5 家族人数(住宅型別)

住宅型 居住者住宅	都営 3DK (賃)	公社 2DK (賃)	公社 3DK (賃)	公社 3DL (分譲)	公社 3LDK (分譲)	平山 台 (建売)	北野 台 (建売)	八王 子 (建売)	滝山 台 (分譲)	計
1人	0	4	0	1	3	1	1	0	1	11
2人	3	22	11	16	5	6	6	5	3	77
3人	21	42	40	29	12	12	16	14	10	196
4人	50	26	37	49	56	50	47	48	23	388
5人	11	4	7	7	20	16	24	21	14	126
6人	1	0	2	0	1	4	3	6	2	19
7人	1	0	0	0	0	0	0	1	1	3
平均 (人)	3.9	3.0	3.5	3.4	3.9	4.0	4.0	4.1	4.0	3.8

表 3-6 くつろぎ行為と食事・接客・就寝の重複

住宅型	生活行為 家族型	くつろぎと食・客・寝の重複							重複 しない くつろぎ	"	"
		食事	接客	就寝	食・客	食・寝	客・寝	食・客・寝			
2DK	C <sub>0</sub> ~Ck <sub>2</sub> (83)	9 10.8	25 30.1	4 4.8	15 18.1	1 1.2	18 21.7	9 10.8	2 2.4	47 56.6	14 16.9
	その他 (8)	2 25.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	3 37.5	3 37.5	0 0.0	3 37.5	2 25.0
3DK (都 公賃 公分)	C <sub>0</sub> ~Ck <sub>2</sub> (215)	21 9.8	104 48.4	13 6.0	47 21.9	3 1.4	16 7.4	6 2.8	6 2.8	138 64.2	42 19.5
	その他 (65)	16 24.6	18 27.7	6 9.2	10 15.4	0 0.0	6 9.2	4 6.2	5 7.7	35 53.8	27 41.5
3LDK	C <sub>0</sub> ~Ck <sub>2</sub> (50)	3 6.0	22 44.0	0 0.0	23 46.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	2 4.0	24 48.0	5 10.0
	その他 (42)	3 7.1	27 64.3	0 0.0	11 26.2	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 2.4	28 66.7	4 9.5
戸建	C <sub>0</sub> ~Ck <sub>2</sub> (155)	11 7.1	75 48.4	2 1.3	53 34.2	2 1.3	1 0.6	0 0.0	11 7.1	89 57.4	26 16.8
	その他 (176)	30 17.0	87 49.4	1 0.6	47 26.7	0 0.0	2 1.1	2 1.1	7 4.0	97 55.1	38 21.6

注1：( )内の数はサンプル数

注2：重複しない「食事」・「接客」は、サンプル全体からくつろぎと重複する「食事」・「接客」を除いたもの

注3：C<sub>0</sub>~Ck<sub>2</sub>=C<sub>0</sub>,C<sub>b</sub>,C<sub>i</sub>,C<sub>k1</sub>,C<sub>k2</sub> その他=C<sub>k3</sub>,C<sub>k4</sub>,C<sub>k5</sub>,C<sub>0</sub><sup>+</sup>,CC,BC

注4：表3-3以外の家族型は除外した

食事をし、接客もする場合も非常に多い。しかし、このような行為の重複は若い家族に多く、年齢層の高い家族では明らかに少ない。このことはLD型の公室平面型が生活行為からみても定着していること、若い世代ではインフォーマルな接客形式がなされることが多いことによると思われる。

#### 2) 公室間取りの理想像

ここでは現実の生活や空間ではなく、理想としての間取り、広さについての居住者の住要求をみる。

##### i 公室の平面型(公室型)

居間、食事スペース、台所の連絡関係から、LDK(ワンルーム)、L・DK(ダイニング・キッチン)、LD・K(クローズド・キッチン)、L・D・K(各室独立)の4タイプを、公室型として設定した。

表3-7は、理想として選択された公室型と、現状の公室型との相関をみたものである。この表では、住宅を3つのグループに分けてある。これは、現在の公室の平面型が各グループ相互で明確な差があるからである。

団地の **2DK** および **3DK** では(DK型)、元来DK部分は面積が小さくLDKとはならないし、隣接の室は専用の居間らしく計画されているとはいえない。現状の平面型がL・DK型(DK型)以外の型の場合には、居住者の工夫で、L・D・K、LD・K(例えばDKのうちKの周辺だけをカーテン等で仕切り、残りのスペースで食事をし、かつ食後も同じ場所でくつろげば、LD・K的な生活、空間構成になる。)あるいはLDK的に使えるようにしつらえることができる。従って戸建住宅(当初の計画からそれら4つの型を含んでいた)、公社 **3LDK** (L・DKおよびLDKの2つの型を含

表 3-7 居住者の考える理想的な公室型(現状公室型別)

現代の公室 理想の公室型	住宅型	2DK 3DK (DKグループ)		戸建 (平,北 八,滝)	合計
L ・ D ・ K	L・D・K	—	—	47 83.9	47 83.9
	LD・K	—	—	4 7.1	4 7.1
	L・DK	—	—	4 7.1	4 7.1
	LDK	—	—	1 1.8	1 1.8
L D ・ K	L・D・K	—	—	30 28.9	30 28.9
	LD・K	—	—	50 48.1	50 48.1
	L・DK	—	—	21 20.2	21 20.2
	LDK	—	—	3 2.9	3 2.9
L ・ D K	L・D・K	26 13.5	8 22.9	46 37.1	80 22.7
	LD・K	37 19.2	5 14.3	16 12.9	58 16.5
	L・DK	111 57.5	22 62.9	58 46.8	191 54.3
	LDK	19 9.8	0 0.0	4 3.2	23 6.5
L D K	L・D・K	4 5.2	6 10.9	1 3.8	11 7.0
	LD・K	26 33.8	19 34.5	8 30.8	53 33.5
	L・DK	33 42.9	17 30.9	12 46.2	62 39.2
	LDK	14 18.2	13 23.6	5 19.2	32 20.3

注：公社および都営住宅では、「L・D・K」・「LD・K」など台所が独立したものは供給されてない。従って団地居住者で、現状が上記の2つのタイプとしたものは有効回答としなかった。

む)と団地の **2DK** ・ **3DK** (DKグループ)の各グループの各グループを同等に扱うことには無理がある。

ii 理想と現状の公室

現状の平面型と同型を選択する率(同型率)が高い。すなわち同一平面型に良い評価を与える傾向があり、現住居が住要求のモデル(知っている空間)として、居住者の住空間のイメージづくりに強くかかわっていることが明らかである。

戸建住宅居住者の場合について現状の各型ごとに評価の高い型をみると、「L・D・K」、「LD・K」、「L・DK」は同型がもっとも高く評価されており、「L・D・K」では84%に達している。戸建居住者の場合一般に「L・D・K」の評価が高く、現状が「LD・K」、「L・DK」の場合にもそれぞれ29%、37%が選択している。このことは、戸建住宅には各タイプの公室型が揃って、特に「L・D・K」は戸建住宅にしかつくられていないということが大きな原因となっているであろう。

DKグループの居住者では「L・DK」がもっとも高く評価され、選択傾向は単調である。「L・DK」の同型率は58%と高いのに「LDK」の同型率は18%と

低い。このことは、団地DKグループでは、「LDK」的な空間構成が、居住者によって工夫されているけれども、満足のいく空間が必ずしもつくり出されていないからであろう。3LDKでは上記DKグループに比較して、やや質のよい「L・DK」型公室空間が供給されており、このことは「L・DK」の同型率が63%と高い値を示していることにも現れている。

現状が「LDK(ワンルーム)」の場合には、どのグループも同型率が低く、一般に評価が低い。しかし低いけれども現状が他のタイプの場合の「LDK(ワンルーム)」選択率と比較すると「LDK」同型率は明らかに高い。ワンルームというのは戸建の場合でわかるように建設されている比率が小さい(8.4%)。また同時に、領域構成を計画する上も難しい点があり、前述の点と合せて、良いモデルを実際に体験する機会が少ないことが評価を下けているとも考えられる。

iii 居間・食事室・客間の理想の広さ

居間と客間の理想の広さは、現住住宅の規模が大きい程より広い。これ対し、食事室の理想の広さは、どの居住者も一定した広さ感を持っている。

**居間**の理想の広さの平均は、DKグループの居住

表3-8 居住者の考える公室の理想的広さ(住宅型別)

室名	住宅型 理想の広さ	都 営	公 社	公 社	公 社	平山台	北野台	八王子	滝山台	合 計	
		3DK (賃貸)	2DK (賃貸)	3DK (賃貸)	3DK (分譲)	3LDK (分譲)	(建売)	(建売)	(建売)		(宅地 分譲)
居 間	15帖~	5 5.7	4 4.2	3 3.2	5 5.1	10 10.3	21 23.6	15 14.6	15 17.0	6 11.3	84 10.4
	12	6 6.9	9 9.4	6 6.3	16 16.2	17 17.5	19 21.3	19 18.4	27 30.7	13 24.5	132 16.4
	10	25 28.7	29 30.2	29 30.5	42 42.2	47 48.5	28 31.5	57 55.3	33 37.5	21 39.6	311 38.5
	8	41 47.1	34 35.4	43 45.3	29 29.3	20 20.6	20 22.5	10 9.7	12 13.6	11 20.8	220 27.3
	~6帖	10 11.5	20 20.8	14 14.7	7 7.1	3 3.1	1 1.1	2 1.9	1 1.1	2 3.8	60 7.4
	平均(帖)	9.0	8.9	8.8	9.7	10.3	11.1	10.8	11.1	10.5	10.0
客 間	10帖~	8 14.8	8 13.6	8 12.5	16 24.2	12 20.3	15 22.7	8 10.3	12 17.4	6 17.6	93 16.9
	8	19 35.2	20 33.9	32 50.0	26 39.4	34 57.6	44 66.7	51 65.4	42 60.9	19 55.9	287 52.3
	6	23 42.6	29 49.2	24 37.5	23 34.8	12 20.3	7 10.6	19 24.4	15 21.7	9 26.5	161 29.3
	4.5	4 7.4	2 3.4	0 0.0	1 1.5	1 1.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	8 1.5
		平均(帖)	7.2	7.2	7.5	7.7	7.9	8.2	7.7	7.9	7.8
食 事 室	10帖~	7 8.0	13 13.4	15 15.8	10 10.1	12 12.4	10 11.2	8 7.8	9 10.2	8 15.1	92 11.4
	8	36 41.4	32 33.0	32 33.7	46 46.5	35 36.1	37 41.6	27 26.5	36 40.9	18 34.0	299 37.1
	6	43 49.4	47 48.5	46 48.4	42 42.4	47 48.5	34 38.2	53 52.0	39 44.3	26 49.1	377 46.7
	4.5帖	1 1.1	5 5.2	2 2.1	1 1.0	3 3.1	8 9.0	14 13.7	4 4.5	1 1.9	39 4.8
		平均(帖)	7.1	7.1	7.3	7.3	7.2	7.1	6.6	7.2	7.3

表 3-9 大人の室・子供の室の住い方(1) - 住宅型別 -

私室の住い方	住宅型	都 営	公 社	公 社	公 社	公 社	平山台	北野台	八王子	滝山台	合 計
		3DK (賃貸)	2DK (賃貸)	3DK (賃貸)	3DK (分譲)	3LDK (分譲)	(建売)	(建売)	(建売)	(宅地 分譲)	
大人 専用 の 部 屋	寝室専用の部屋 はない。	17 21.5	41 51.9	20 26.7	25 32.5	12 12.9	9 12.0	8 8.2	4 4.6	5 4.6	141 19.7
	寝室専用が全員 にはない。	17 21.5	17 21.5	11 14.7	13 16.9	5 5.4	3 4.0	3 3.1	0 0.0	2 3.8	71 9.9
	寝室専用が全員 にある	45 57.0	21 26.6	44 58.7	39 50.6	48 51.6	35 46.7	38 39.2	33 37.9	21 40.4	324 45.4
	趣味・仕事もできる 広さの学問部屋	—	—	—	—	15 16.1	15 20.0	26 26.8	23 26.4	10 19.2	89 12.5
	寝室以外に大人 専用の部屋がある	—	—	—	—	13 14.0	13 17.3	22 22.7	27 31.0	14 26.9	89 12.5
子 供 部 屋	子供専用の部屋 はない	34 40.0	68 84.0	33 38.4	27 30.7	15 16.3	4 5.1	6 6.5	9 10.1	10 20.4	206 27.8
	子供専用の部屋 がある	51 60.0	13 16.0	53 61.6	61 59.3	69 75.0	59 74.7	71 76.3	56 62.9	27 55.1	460 62.0
	友人を呼べる広 い個室がある	—	—	—	—	3 3.3	11 13.9	11 11.8	19 21.3	9 18.4	53 7.1
	寝室以外に子供 専用の部屋がある	—	—	—	—	5 5.4	5 6.3	5 5.4	5 5.6	3 6.1	23 3.1

注：公社および都営の2DKと3DKは規模(室数・面積)が小さく、原則として次の室は無いと考えた。

- ① 大人の室の場合…「趣味のできる広い室」・「寝室以外の大人専用室」  
 ② 子供の室の場合…「友人を呼べる広い室」・「寝室以外の子供専用室」

者が9帖、公3LDKが10帖、滝山台が10.5帖、そしてその他の戸建(平, 北, 八)が10.8帖となっている。また「客間」の理想の広さの平均は、DKグループの居住者が7.2~7.7帖、戸建と3LDKは8帖前後となっている。それに対し、「食事室」については、DKグループの平均が7.2帖、戸建は7.0帖であり、住宅型ごとに個別にみても大きな差はない。

### 3) 私室の生活像

#### i 私室の確立の実態

私室の住い方は住宅の規模によって大きく制約される。

大人の寝室専用の部屋がない住宅は、団地DKグループで約1/2であるのに対し、公3LDKや戸建住宅では平均で約1/3に過ぎない。DKグループでは、DKに隣接した南向きの6帖を居間とすることが多い。既に述べたように、この部屋は居室としての条件が他の部屋に比べて良いため、子供が幼くて部屋数に余裕のある若い家族でも、この部屋を居間兼主寝室とする場合が少なくない。

私室の確立は、居室数と家族数、特に一定の年齢に達した子供の数が決定的要因だが、今日の家族の状況は、家族人数が少なくなっており、居室数という基本的条件は3LDKを中心に1室の増減程度の範囲が問題の中心となっている。

余剰の室がある場合には、その室は大人用の室とされることが多い。寝室以外に大人専用の室・子供専用の室があるものをみると、戸建では「大人専用室がある」が17~30%に対し「子供専用室がある」は5~6%となっている。

大人と子供がともに専用の室があるのは、団地3DK

では4割だが、公3LDKでは7割弱、戸建では8割を越える。

また大人か子供のいずれか一方が専用の室がない率をみると、公2DK以外ではいずれも「子供の方のみ専用の室を持つ」場合の方が比率が高い。ここで特に注目されるのは公3DK(分)である。この住宅は規模が小さいにもかかわらず、団地3DKのうちでは、もっとも高い年齢層の家族が居住している。このタイプでは、「子供のみ」の場合の比率は37.3%もあり、大人のみ持つ場合に対して2.3倍と他の住宅型の居住者に較べて断然高い値を示している。このことは子供が成長すると、子供室に対する要求は増加するが、室数が不足している場合には、大人の室よりも子供の室が優先して確保される可能性が大きいことを示している。

#### ii 私室の理想像(住い方と室の広さ)

大人の室(主として主寝室)と子供室に対する理想像にも、家族の成長段階と現住居(特に規模)の2つの条件が反映しており、その対応関係には住要求発生の特徴的な様子がうかがわれる。

家族型と住い方の理想との関係からみると、居住者の年齢層が高いと大人の室の機能の充実を望む住要求が多く(Ck<sub>2</sub>~Ck<sub>5</sub>では「寝室以外に大人専用の室」が20%)子供室に対しては、むしろ、若い世代(Co~Ck<sub>2</sub>では、「寝以外に子供専用室」が約25%)に機能充実の住要求が多い。

主寝室の広さの理想は平均で7.4帖で、各家族型間に大きな差はなく(各型の平均値=7.0~7.7帖)、世代と広さの間に相関関係はみられない。むしろ住宅の規模と

表3-10 大人の室・子供の室の住い方(2) - 住宅型別 -

私室の住み方	住宅型	都 営	公 社	公 社	公 社	公 社	平山台	北野台	八王子	滝山台	合 計
		3DK (賃貸)	2DK (賃貸)	3DK (賃貸)	3DK (分譲)	3LDK (分譲)	(建売)	(建売)	(建売)	(宅地 分譲)	
(A)大人も子供も専用の部屋がある	27 36.0	3 4.2	29 40.8	22 32.8	60 68.2	55 82.1	75 84.3	76 88.4	34 69.4	410 37.5	
(B)大人にはあるが子供の専用の室はない	15 20.0	13 18.2	12 16.9	11 16.4	12 13.6	2 3.0	5 5.6	6 7.0	8 16.3	101 14.2	
(C)子供にはあるが大人の専用の部屋はない	19 25.3	9 12.7	15 21.1	25 37.3	14 15.9	9 13.4	8 9.0	2 2.3	5 10.2	110 15.4	
(D)大人も子供も専用の部屋がない	14 18.7	46 64.8	15 21.1	9 13.4	2 2.3	1 1.5	1 1.1	2 2.3	2 4.1	92 12.9	
(C) 子供の優先度	1.3	0.7	1.3	2.3	1.2	-	-	-	-	1.1	
(B)											

※ 大人の部屋については、「専用の部屋はない」、「専用が全員にはない」の2つを(C),(D)に、他の場合を(A),(B)とした。

注2: 公社および都営の2DKと3DKは相模(室数・面積)が小さく、原則として次の室は無いと考えた。

- ① 大人の室の場合…「趣味のできる広い室」・「寝室以外の大人専用室」
- ② 子供の室の場合…「友人を呼べる広い室」・「寝室以外の子供専用室」

表3-11 理想的な大人の室・子供の室(1) - 家族型別 -

私室の理想像		Co <sup>-</sup>	Cb	Ci	Ck <sub>1</sub>	Ck <sub>2</sub>	Ck <sub>3</sub>	Ck <sub>4</sub>	Ck <sub>5</sub>	Co <sup>+</sup>	CC	BC	合計
私室の理想像	大 寝室専用の部屋があれば十分	5 10.6	15 16.0	29 18.1	23 21.3	10 12.2	18 24.0	7 15.6	7 10.0	8 36.4	6 35.3	9 18.8	137 17.8
	大 趣味・仕事もできる広い専用の部屋	30 63.8	61 64.9	100 62.5	69 63.9	54 65.9	37 49.3	26 57.8	41 57.7	8 36.4	8 47.1	29 60.4	463 60.2
	大 寝室のほかに大人だけの部屋	8 17.0	14 14.9	25 15.6	13 12.0	18 22.0	17 22.7	10 22.2	17 23.9	4 18.2	2 11.8	7 14.6	135 17.6
	大 なんともしえない	4 8.5	4 4.3	6 3.8	3 2.8	0 0.0	3 4.0	2 4.4	6 8.5	2 9.1	1 5.9	3 6.3	34 4.4
	大 睡眠・勉強のできる専用部屋	20 51.3	53 55.8	86 52.4	56 51.4	35 42.7	49 64.5	21 46.7	38 51.4	8 66.7	4 25.0	4 23.0	393 51.8
	大 友人が呼べる広い個室	10 25.6	20 21.1	35 21.3	24 22.0	24 29.3	17 22.4	18 40.0	25 33.8	2 16.7	4 25.0	11 23.9	190 25.1
	大 寝室のほかに子供だけの部屋	6 15.4	18 18.9	40 24.4	28 25.7	22 26.8	10 13.2	5 11.1	6 8.1	2 16.7	7 43.8	9 19.6	153 20.2
	大 なんともしえない	3 7.7	4 4.2	3 1.8	1 0.9	1 1.2	0 0.0	1 2.2	5 6.8	0 0.0	1 6.3	3 6.5	22 2.9
	大 10帖(10帖以上を含む)	8 17.0	9 9.5	24 14.8	10 9.1	14 17.1	11 14.7	7 15.6	9 12.3	1 4.3	2 11.1	12 23.5	107 13.7
	大 8	17 36.2	31 32.6	63 38.9	53 48.2	40 48.8	39 52.0	21 46.7	40 54.8	12 52.2	8 44.4	19 37.3	343 43.9
	大 6	21 44.7	50 52.6	73 45.1	46 41.8	25 30.5	24 32.0	17 37.8	22 30.1	10 43.5	8 44.4	20 39.2	316 40.5
	大 4.5	1 2.1	5 5.3	2 1.2	1 0.9	3 3.7	1 1.3	0 0.0	2 2.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	15 1.9
大 平均	7.4	7.0	7.4	7.3	7.6	7.6	7.6	7.5	7.2	7.3	7.7	7.4	
大 10帖(10帖以上を含む)	2 5.3	9 9.6	42 25.9	36 32.7	25 30.9	12 16.0	4 8.9	11 15.3	1 8.3	4 22.2	8 16.7	154 20.4	
大 8	6 15.8	17 18.1	40 24.7	25 22.7	25 30.9	17 22.7	15 33.3	23 31.9	2 16.7	4 22.2	8 16.7	182 24.1	
大 6	24 63.2	51 54.3	70 43.2	45 40.9	29 35.8	45 60.0	26 57.8	36 50.0	9 75.0	9 50.0	28 58.3	372 49.3	
大 4.5	6 15.8	17 18.1	10 6.2	4 3.6	2 2.5	1 1.3	0 0.0	2 2.8	0 0.0	1 5.6	4 8.3	47 6.2	
大 平均	6.3	6.5	7.4	7.7	7.8	7.1	7.0	7.2	6.7	7.3	6.5	7.2	

表3-12 理想的な大人の室・子供の室(2) — 住宅型別 —

住宅型		都	公	公	公	公	平	北	八	滝	合	
		3DK (賃貸)	2DK (賃貸)	3DK (賃貸)	3DK (分譲)	3LDK (分譲)	山台 (建売)	野台 (建売)	王子 (建売)	山台 (宅地 分譲)		計
私 の 大 人 の 室	寝室専用の部屋があれば十分	23 26.7	24 27.3	18 19.8	17 17.9	11 12.0	15 21.1	9 9.5	11 13.3	9 18.4	137 18.3	
	趣味・仕事もできる広い専用部屋	42 48.8	47 53.4	56 61.5	58 61.1	62 67.4	42 59.2	62 65.3	50 60.2	29 59.2	448 59.7	
	寝室のほかに大人だけの部屋	16 18.6	14 15.9	15 16.5	17 17.9	17 18.5	10 14.1	19 20.0	16 19.3	8 16.3	132 17.6	
	なんともいえない	5 5.8	3 3.4	2 2.2	3 3.2	2 2.2	4 5.6	5 5.3	6 7.2	3 6.1	33 4.4	
	子 供 の 室	睡眠・勉強ができる専用の部屋	39 45.9	47 56.6	47 54.0	48 52.7	45 48.9	42 62.7	48 52.7	45 51.1	25 52.1	386 52.7
		友人が呼べる広い個室	20 23.5	16 19.3	21 24.1	26 28.6	25 27.2	10 14.9	27 29.7	24 27.3	8 16.7	177 24.1
		寝室のほかに子供だけの部屋	24 28.2	17 20.5	18 18.4	16 17.6	16 17.4	12 17.9	13 14.3	18 20.5	14 29.2	148 20.2
		なんともいえない	2 2.4	3 3.6	2 2.3	1 1.1	6 6.5	3 4.5	3 3.3	1 1.1	1 2.1	22 3.0
	私 の 大 人 の 室	10帖(10帖以上を含む)	6 6.9	8 8.0	8 8.3	6 6.1	19 19.6	15 16.9	21 20.4	18 20.2	10 19.2	111 13.8
		8	19 21.8	26 27.4	37 38.5	43 43.9	43 44.3	49 35.1	52 50.5	55 61.8	24 46.2	348 43.2
6		57 65.5	54 56.8	50 52.1	47 48.0	33 34.0	25 28.1	29 28.2	16 18.0	18 34.6	329 40.8	
4.5		5 5.7	7 7.4	1 1.0	2 2.0	2 2.1	0 0.0	1 1.0	0 0.0	0 0.0	18 2.2	
平均(帖)		6.6	6.8	7.1	7.1	7.6	7.8	7.8	8.0	7.7	7.4	
子 供 の 室	10帖(10帖以上を含む)	21 24.7	13 14.4	14 15.2	12 12.8	31 33.0	14 16.3	21 21.4	17 19.3	12 24.5	155 20.0	
	8	14 16.5	16 17.8	26 28.3	22 23.4	24 25.5	28 32.6	13 13.3	31 35.2	13 26.5	187 24.1	
	6	41 48.2	41 45.6	44 47.8	56 59.6	38 40.4	42 48.8	61 62.2	39 44.3	22 44.9	384 49.5	
	4.5	9 10.6	20 22.2	8 8.7	4 4.3	1 1.1	2 2.3	3 3.1	1 1.1	2 4.1	50 6.4	
	平均(帖)	7.2	6.6	7.0	6.9	7.8	7.3	7.1	7.5	7.4	7.2	

関係がある。理想の広さは、現住居の規模が小さいと（DKグループ＝6.0～7.1帖）6帖が中心となり、規模が大きいと（戸建＝7.7～8.0帖）8帖が中心となる。

子供室の広さの理想は平均で7.2帖で、主寝室と同様に、住宅規模との間に明らかな相関がみられる（DKグループ＝6.6～7.2帖；3LDと戸建＝7.1～7.8）同時に主寝室の場合と異なり、世代によって理想の広さに差がある。すなわち、Ci、Ck<sub>1</sub>、Ck<sub>2</sub>（各7.4、7.7、7.8帖）は他の世代の居住者より大きい理想を持っており8帖以上とする比率が高い（Co・Cb＝6.3、6.5帖、Ck<sub>3</sub>・Ck<sub>4</sub>・Ck<sub>5</sub>＝7.1・7.0・7.2）。

以上のことをまとめると次のようになる。

主寝室については、年齢が高くなると室の充実を望む意識が生じるが、家族の世代が高くなっても理想の広さに大きな違いがなく、広さに対する要求は、現状の広さを肯定した値を示しているといえる。

子供室については、子供が幼い時期に（Ci～Ck<sub>2</sub>）、子供に対する期待感と現実性の希薄さから理想にみる要求はもっとも拡大している。これに対し、上の世代（Ck<sub>3</sub>

～Ck<sub>5</sub>）では現実的で妥当な理想像といったものになっており、下の世代では（Co、Cb）、小規模住宅（2DK、公3DK貸）の居住者が多いことがあってか、実際の要求は高いのに、理想とする広さはむしろ小さい（Co・Cb＝6.3、6.5帖）というようにアンバランスな住要求となっている。

#### 4) 客間、納戸、仕事部屋および家事室の理想像

これらの室は、前述の公室や寝室のようにどの住宅にも必ずあるというものではない（以後、特別室と呼ぶ）。従ってこれらの各室が必要か否かという判断は、現住居にそれらの室が設けられているか否かに強い関連があると考えられる。現に設けている居住者が必要だとする場合は、それらの室が実際にそういった室としての役割を果たしている事実の裏付けがあるのであって、現在それらの室を設けていない居住者が、ややあこがれるに必要と判断しているのとは差がある。ここでは、現実性という観点から、前者の場合を「必要度」、後者の場合を「必要感」として一応区別している。

表3-13 【客間，納戸，主人の仕事部屋，家事室】の必要性(1)

室名	現状	住宅型 必要性	都 営 公 社					平	北	八	滝	合 計
			3DK (賃貸)	2DK (賃貸)	3DK (賃貸)	3DK (分譲)	3LDK (分譲)	山 台 (戸建 建売)	野 台 (戸建 建売)	王 子 (戸建 建売)	山 台 (宅地 分譲)	
客 間	有	是非必要	—	—	—	—	20 83.3	48 80.0	49 75.4	44 78.6	16 72.7	177 78.0
		特に必要でない	—	—	—	—	4 16.7	12 20.0	16 24.6	12 21.4	6 27.3	50 22.0
	無	必要	52 62.7	50 56.8	47 52.2	47 47.5	25 37.9	5 27.8	7 26.9	8 33.8	6 24.0	247 47.6
		必要でない	29 37.3	38 43.2	43 47.8	52 52.5	41 62.1	13 72.2	19 73.1	16 66.7	19 76.0	272 52.4
納 戸	有	必要	—	—	—	—	21 77.8	22 95.7	9 100.0	26 100.0	17 100.0	95 93.1
		必要でない	—	—	—	—	6 22.2	1 4.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	7 6.9
	無	必要	48 61.5	49 53.3	60 66.7	64 62.7	55 83.3	37 62.7	45 52.3	39 65.0	21 65.6	418 62.9
		必要でない	30 38.5	43 46.7	30 33.3	38 37.3	11 16.7	22 37.3	41 47.7	21 35.0	11 34.4	247 37.1
主 人 の 仕 事 部 屋	有	必要	—	—	—	—	32 97.0	37 90.2	39 90.7	39 92.9	17 94.4	164 92.7
		必要でない	—	—	—	—	1 3.0	4 9.8	4 9.3	3 7.1	1 5.6	13 7.3
	無	必要	41 48.2	42 45.2	53 57.0	63 62.4	37 62.7	19 46.3	23 45.1	16 40.0	12 40.0	306 51.6
		必要でない	44 51.8	51 54.8	40 43.0	38 37.6	22 37.3	22 53.7	28 54.9	24 60.0	18 60.0	287 48.4
家 事 室	有	必要	—	—	—	—	22 91.7	20 87.0	20 90.9	25 92.6	13 92.9	100 90.9
		必要でない	—	—	—	—	2 8.3	3 13.0	2 9.1	2 7.4	1 7.1	10 9.1
	無	必要	34 43.6	41 46.6	43 47.8	43 43.0	33 50.8	18 31.0	23 32.9	27 50.9	13 39.4	275 43.3
		必要でない	44 56.4	47 53.4	47 52.2	57 57.0	32 49.2	40 69.0	47 67.1	26 49.1	20 60.6	360 56.7

注：公社および都営住宅の2DKと3DKは規模(室数・面積)が小さく、原則としてこれらの室は「無」とした。  
ただし、居住者が工夫して、そういった使い方をしていることがあり、「有」とした居住者がいた。

i 客間の住要求

客間は特別室のうちでもっとも多く設けられている(30.4%)。どの特別室とも、住宅が広くなると設けられる率が高くなるが、客間の場合は特にその傾向が強く、滝山台(44.1%)以外の戸建住宅では7割以上が設けている。

現に客間を設けている者の必要度は、年齢が高いほど強くなる。「必要」とした家族は、CbやCiといった若い家族では少なく(63.2%、65.2%)。Ck<sub>4</sub>、Ck<sub>5</sub>、BCといった家族では非常に多い(88.9%、86.8%、92.9%)。

次に客間が無い場合の「必要感」についてみると、団地居住の方が戸建住宅の居住者よりも「必要感」が強い(都3DK=60.3%、公2DK=57.3%、公3DK=46.6%に対し八王子=33.3%がもっとも多く、滝山台=24.0%との間に平山台、北野台がある)。団地では、公室に余裕が無い(寝室兼用の居間やDKを居間としても使用するなど)場合が多いことから生じていると思われる。これに対し、戸建住宅では、たとえ専用の

客間が無くても、殆どの場合に居間が確立しており、接客の際に、他の家族の生活が乱されることが少ないことによると考えられる。

ii 必需室としての納戸

納戸は、特別室のうち、設けられている率をもっとも低い。しかしながら「必要」とする居住者は非常に多く、現に設けられている居住者の93.1%、設けていない居住者の62.9%にのぼる。納戸に対する必要性の意識は、他の室とは異なっていて、現在設けていない戸建居住者でも「必要」とした比率が高い。このことは、他の室ならば、公私室の一部を使ったり、一時的に転用したりすることで機能を果すことができるのに対して、納戸の機能が一定量のスペースを占有することから専用の室でなければならないことと同時に、住宅内の物品が増加する傾向にあるといわれており、現実問題として必要な収納スペースが増大していることによると考えられる。

納戸の機能および必要性から、住宅においては、予め計画されるべき必需的標準的な室であることが分かる。

iii 仕事部屋と家事室

表3-14 [客間, 納戸, 主人の仕事部屋, 家事室]の必要性(2)

室名	現況	家族型											計	
		Co <sup>-</sup>	Cb	Ca	Ck <sub>1</sub>	Ck <sub>2</sub>	Ck <sub>3</sub>	Ck <sub>4</sub>	Ck <sub>5</sub>	Co <sup>+</sup>	CC	BC		
客間	有	是非必要	18 85.7	12 63.2	30 65.2	27 81.8	29 82.9	25 71.4	16 88.9	33 86.8	5 71.4	4 80.0	13 92.9	218 77.9
		特上必要でない	3 14.3	7 36.8	16 34.8	6 18.2	6 17.1	10 28.6	2 11.1	5 13.1	2 28.6	1 20.0	1 8.1	62 22.1
	無	必要	13 56.5	27 39.1	42 38.9	31 45.6	20 46.5	15 40.5	12 50.0	14 48.3	1 9.1	5 50.0	19 61.3	206 44.3
		必要でない	10 43.5	42 60.9	66 61.1	37 54.4	23 53.5	22 59.5	12 50.0	15 51.7	10 90.9	5 50.0	12 38.7	259 55.7
納戸	有	必要	7 87.5	17 89.5	22 88.0	9 75.0	12 85.7	13 92.9	8 100.0	15 100.0	4 100.0	6 100.0	12 100.0	129 91.5
		必要でない	1 12.5	2 10.5	3 12.0	3 25.0	2 14.3	1 7.1	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	12 8.5
	無	必要	23 60.5	43 58.1	85 64.9	52 57.8	38 58.5	36 62.1	23 62.2	36 65.5	7 46.7	6 60.0	24 70.6	383 61.3
		必要でない	15 39.5	31 41.9	46 35.1	38 42.2	27 41.5	22 37.9	14 37.8	19 34.5	8 53.3	4 40.0	10 29.4	242 38.7
主人の仕事部屋	有	必要	17 00.0	20 83.3	48 94.1	24 85.7	23 95.8	18 94.7	12 100.0	18 90.0	5 83.3	5 83.3	15 100.0	213 92.2
		必要でない	0 0.0	4 16.7	3 5.9	4 14.3	1 4.2	1 5.3	0 0.0	2 10.0	1 16.7	1 16.7	0 0.0	18 7.8
	無	必要	12 46.2	34 51.5	54 48.2	33 44.0	36 63.2	29 53.7	14 43.8	21 42.0	3 25.0	2 18.2	17 53.1	256 47.6
		必要でない	14 53.8	32 48.5	58 51.8	42 56.0	21 36.8	25 46.3	18 56.2	29 58.0	9 75.0	9 81.8	15 46.9	282 52.4
家事室	有	必要	12 85.7	17 89.5	20 83.3	25 86.2	13 86.7	13 100.0	9 90.0	17 85.0	8 88.9	3 100.0	7 100.0	149 88.2
		必要でない	2 14.3	2 10.5	4 16.7	4 13.8	2 13.3	0 0.0	1 10.0	3 15.0	1 11.1	0 0.0	0 0.0	20 11.8
	無	必要	10 34.5	25 36.2	47 35.9	27 37.0	26 41.3	26 43.3	17 51.5	19 42.2	3 33.3	4 36.4	18 48.6	226 39.2
		必要でない	19 65.5	44 63.8	84 64.1	46 63.0	37 58.7	34 56.7	16 48.5	26 57.8	6 66.7	7 63.6	19 51.4	350 60.8

主人の仕事部屋と主婦の家事室に対する必要性は類似している。主人と主婦の年齢や、住宅の規模との相関は顕著ではなく、いずれの場合でも高い「必要度」と一定の「必要感」があることがわかる。またどの規模の住宅の居住者も「必要感」に差がないのは、それらの用途の室が専用の室として確保されていなくても、公室または私室の一部を使用することで比較的容易に代用できることを示している。しかし、同時に、それらの室を設けている居住者の「必要度」の高さからみて、現実に有効に機能していることも示されている。(必要度は仕事部屋 = 92.2%, 家事室 = 88.2%)

以上、これらの4つの室は住宅規模が大きくなると設けられることが多くなるが、同時に、現にそれらの室を設けている居住者の評価「是非必要」とする比率は高く8割から9割にも達する。つまり、これらの室を必要とする生活行為は、相当の必要性・必然性があると考えられる。

### 5. まとめ

居住者の条件として、その自然的特性である家族—主に家族同期に着目し、現住居とそこでの住い方および住居の理想像への関連を分析・考察した。分析の結果は、

要約すると以下である。

- 公室の使われ分では、だんらんと寝就の不分離が、団地DKグループに多く見られ、その公室平面、規模に問題があることが、再確認された。3LDKや独立住宅では、問題はない。
- 公室の使われ方として、独立住宅を標準とすると、各行為の重複が、若い世代ほど進んでおり、だんらん、食事と接客行為の関係で、だんらんで90~100%、接客で70~90%、食事で40~50%他の少なくともひとつの行為との重複が見られる。(表3-6)今後一層、この傾向が進行するだろう。
- 公室LDKの型の理想は、LDKのワンルームを除き、現住居にひきづられた回答となり、今後は、DK型の影響が残ることが問題だが、多様化するだろう。
- 接客室は、高年齢家族ほど必要とされるが、当然の結果である。
- 私室の実態としては、ふとん就寝が団地63%、戸建33%、専用化の程度では大人の私室において、団地61%、戸建89%、子供の私室において、団地60%、戸建91%である。現住居の規模と家族

人数に制約されるが、今後、洋風化、専用化が進むだろう。(表3-9)

f) 私室の理想としては、家族周期による差があり、若い家族は、子供室の充実、高年齢の家族は、大人の私室の充実が、要求される。

g) 特別室としては、必需室としての納戸、持っている人は、意味が分かる仕事室・家事室とそれぞれ問題が異なっている。

h) 規模の面での現想では、現住居の制約がないものとして食事室(7帖程度)、団地は低く、戸建では高く制約を受けるものとして居間(9~11帖)、客間(7~8帖)、主寝室(7~8帖)、子供室(6~8帖)の区別がある。

以上、家族周期段階の住要求への影響は、特に公室での行為の重複の程度に示されることが判明したが、居住者にとって、現住居が、多くの面で理想像のモデルや制約となっており、将来の住様式の動向にとって、大きな問題と考えられる。居住者が、居住者自身の主体性や工夫の中から、現住居に把られぬ方向を見出せるような状況が必要である。

#### § 4. 伝統的住様式

##### 1 伝統の概念

家族・現住居の条件が、住要求を方向付け、制約を与えていく側面に続いて、特に、伝統性にかかわる住要求の形成とその将来の方向性について考察する。

伝統には、ふたつの内容がある。ひとつは、既成の継承されてきたものであり、他のひとつは、形成されつつある、新しい伝統である。

住居と住生活について、このふたつは、継承されてきた古い内容として、「統間」や起居様式の「坐式」など、新しい内容として、モダン・リビングの「DK」やテレビを見ながらの「だんらん」を挙げることができる。

伝統は、機能的・合理的な住居観・生活観を徹底したところでは、必ずしも適切なものとは考えられないことがある。いわゆる、近代化した住居・生活が、伝統を捨てるといわれてきたのは、このためである。これは、伝統を支えている価値観に、合理性を超えた、いわば非合理性を含んでいるからである。

非合理的なものでありながら、社会的な公認を、あるいは多数の肯定を得て存在する伝統は、強くいえば、掟のようなもので、規範として住居・生活を方向づけていく。

規範としての伝統が、どのように形成されていくのか。また、古い伝統が、新しいものにどのように取ってかわられるのか。伝統に関する関心は、多様である。しかしここでは、主にいわゆる伝統的な住居のつくりと住生

表4-1 室数と各室の洋室化傾向(戸建住宅地-実態)

	くつろぐ室	食事室	接客室	夫婦寝室	子供室
~2室	83.3%	100.0	0.0	33.3	0.0
3	90.2	98.0	31.8	13.7	95.1
4	94.1	97.3	29.1	22.0	95.4
5	88.1	98.5	43.9	25.4	92.3
平均	91.7	97.6	32.8	21.4	93.8

表4-2 家族周期(成長・安定・衰退期)の進行と床様式(実態)

	くつろぐ室	食事室	接客室	夫婦寝室	子供室
団地	洋化(67.3)%	洋化(12.0)	洋化(71.6)	和化(90.8)	洋化(62.2)
戸建住宅地	洋化(8.4)	一定(2.3)	一定(68.5)	和化(79.3)	一定(12.0)

(数値=タタミ室の平均値%)

活の、将来への継承の可能性を考察したい。現代の住生活の中で、過去に形成された伝統の変質を占なりわけである。現代の住生活は、古い伝統を捨ててくるものがあるのか、それとも、伝統の中に、現代の合理性において再評価されていくものがあるか、あるいは、骨董的価値として残存していくものか。

以上の点について、前項の「理想の住居」と同様に、居住者の家族周期段階、現住居の二点を軸に、分析・検討を行う。調査は、前項と同一の多摩ニュー・タウン及び周辺独立住宅居住者に加えて、秋田県の「統間型」独立住宅の居住者を対象にしたものである。

##### 2 床様式の動向

###### 1) 和・洋の実態

表に、示すように、くつろぐ室、食事室、子供室の洋室化は、90%以上(戸建住宅)であり、接客室、夫婦寝室の半数以下の様子と比較して、タタミの使用(和室)は考えられないほどである。団地は、既成の住戸平面型であるので必ずしも、傾向を示しているとはいえないが、食事室では同様の実態である。(表4-1)

住居の室数との関係では、くつろぐ室、接客室、夫婦寝室で、規模に対応し、洋室化しているようである。(表4-1) また、戸建住宅地において、家族周期と対応関係のない部屋と、ある部屋があることが分かる。食事室、子供室(以上ほとんど洋室)、接客室(和室)は、洋室・和室の比率に変化がない。それに対し、家族周期の進行に対し、くつろぐ室は洋室化する。夫婦寝室は和室化することが分かった。もちろん、家族周期の進行は、同一の世代の追跡によるものでなく、現在の若い世代と高年齢世代の関係からいったものであるから、このことから、将来の動向を云々するには問題がある。

しかし、若い世代のみならず高年齢世代が、洋室を受け入れていることは事実であり、とすれば、想定しがちな高年齢世代での伝統志向の強さが、必ずしも検証されない点、関心をひく。(表4-2)

次に、住戸の平面類型との関係を、表4-3, 4-4から検討する。首都圏の独立住宅であるので、統間型などの平面型そのものに伝統性を残したものはないが、先に見た、くつろぐ室、食事室、子供室での洋室化傾向、接客室、夫婦寝室でのタタミの使用傾向は、やはりはっきりしている。しかし、平面型に条件付けられた傾向もいくつか見られる。各室廊下アクセス型は、もっとも近代的な平面型であるが、これに対応し、接客室・夫婦室を除く他の室の洋室化は典型的である。興味深いのは、後にも触れるが、各室廊下アクセス型で、タタミの接客室が一番多いことである。また、制約を受けたDKホール型では、傾向は似ているが、タタミのくつろぐ室がもっとも多く、逆に洋室の接客室も多い。これは、団地のDKホール型にも通じて云える。

表4-3 平面類型別の各室洋室化傾向(戸建住宅地-実態)

	くつろぐ室	食事室	接客室	夫婦寝室	子供室
廊下アクセス型	95.3%	98.4	28.6	21.1	95.9
Lホール型	96.2	100.0	47.1	16.7	90.2
DKホール型	66.7	93.3	46.2	13.3	92.3
統間型	80.0	90.0	33.3	20.0	90.0
平均	91.7	97.6	32.8	21.4	93.8

表4-4 平面類型別の各室洋室化傾向(団地-実態)

	くつろぐ室	食事室	接客室	夫婦寝室	子供室
廊下アクセス型	19.8%	86.2	20.0	3.5	3.8
DKホール型	35.9	88.5	30.5	10.5	49.8
平均	33.0	88.1	28.6	9.2	40.6

表4-5 くつろぐ室のしつらえと室数(戸建)

	1室	2	3	4	5	6~	不明	合計
和風			10%	7	2	2	2	23
			20.0	3.8	3.1	12.5		6.9
和・洋半々			11	35	12	2		61
			22.0	18.9	18.5	12.5		18.4
洋風			29	143	51	12		248
			58.0	77.3	78.5	75.0		74.7
不明			1	2	2	0	2	7
合計			51	187	67	16	2	339
			100.0	100.0	100.0	100.0		100.0

団地の方の廊下アクセス型では、和室のくつろぐ室が多く、フラットの団地型ともいべき平面型の制約が予想される。これと同様の事が、タタミの子供室が多いことにもあらわれている。意味は違いが、タタミの接客室が多い点も、特徴である。

## 2) 床様式の理想

次に、各室の床様式の望ましいあり方(理想)について分析してみよう。

まず、くつろぐ室における、現在のしつらえを見ると、洋風は、戸建で75%, 団地で45%, 和風は、戸建で7%, 団地で22%である。しつらえと住宅規模(室数)との関係は、戸建、団地とも、室数の増加と洋風しつらえの割合増加が、対応している。しかし、4室以上では、あまり変化はない。住戸の平面型との関係では、戸建で廊下アクセス型に、洋風が多く、DKホール

表4-6 くつろぐ室のしつらえと室数(団地)

	1室	2	3	4	5	6~	不明	合計
和風	29%	61	7	1			7	105
	31.2	23.6	8.6	10.0				22.3
和・洋半々	35	85	17	1			10	148
	37.6	32.9	21.0	10.0				31.5
洋風	29	112	57	8			11	217
	31.2	43.4	70.4	80.0				46.1
不明	3	11	0	0			1	15
合計	96	269	81	10			29	485
	100.0	100.0	100.0	100.0				100.0

表4-7 くつろぐ室のつらえと平面型(戸建)

	廊下アクセス	Lホール	DKホール	統間	その他	不明	合計
和風	9%	2	1	1	2	8	23
	4.8	3.7	6.7	10.0	40.0		6.9
和・洋半々	28	14	4	0	1	14	61
	15.0	25.9	26.7		20.0		18.4
洋風	154	38	10	8	2	40	248
	82.4	70.4	66.7	80.0	20.0		74.7
不明	4	0	0	1	0	2	7
合計	191	54	15	10	5	64	339
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0		100.0

表4-8 くつろぐ室のしつらえと平面型(団地)

	廊下アクセス	Lホール	DKホール	統間	その他	不明	合計
和風	19%		86				105
	22.3		22.6				22.3
和・洋半々	32		116				148
	37.6		30.5				31.5
洋風	34		183				217
	40.0		48.2				46.1
不明	5		10				15
合計	90		395				485
	100.0		100.0				100.0

表 4-9 くつろぐ室のしつらえ(戸建)

家 族 周 期		和風	和・洋 半々	洋風	不明	合計
成長 家族	婦令40才以下 子なし	0 %	1 16.7	5 83.3	0	6 100.0
	" 長子10才以下	9 7.0	25 19.4	89 69.0	6 4.7	129 100.0
	上記の複合家族	0	0	1 100.0	0	1 100.0
安定 家族	婦令40才以下 長子11才以上	1 1.8	9 16.4	45 81.8	0	55 100.0
	婦令41才~60才 子なし	2 5.0	1 12.5	5 62.5	0	8 100.0
	" 子あり	4 5.1	17 21.8	57 73.1	0	78 100.0
	上記の複合家族	0	0	0	0	0
衰退 家族	婦令61才以上	0	4 80.0	1 20.0	0	5 100.0
	不 明 等	7 12.3	4 7.0	45 78.9	1 1.8	57 100.0
合 計		23 6.8	61 18.0	248 73.2	7 2.1	339 100.0

表 4-10 くつろぐ室の床様式の理想(戸建)

家 族 周 期		和	洋	不明	合計
成長 家族	婦令40才以下 子なし	2 % 33.3	4 66.7	0	6 100.0
	" 長子10才以下	17 13.2	107 82.9	5 3.9	129 100.0
	上記の複合家族	0	1 100.0	0	1 100.0
安定 家族	婦令40才以下 長子11才以上	6 10.9	48 87.3	1 1.8	55 100.0
	婦令41才~60才 子なし	2 25.0	3 37.5	3 37.5	8 100.0
	" 子あり	17 21.8	60 76.9	1 1.3	78 100.0
	上記の複合家族	0	0	0	0
衰退 家族	婦令61才以上	1 20.0	4 80.0	0	5 100.0
	不 明 等	13 22.8	37 64.9	7 12.3	57 100.0
合 計		58 17.1	264 77.9	17 5.0	339 100.0

表 4-11 くつろぐ室のしつらえ(団地)

家 族 周 期		和風	和・洋 半々	洋風	不明	合計
成長 家族	婦令40才以下 子なし	6 % 14.6	19 46.3	16 39.0	0	41 100.0
	" 長子10才以下	62 21.0	89 30.2	133 45.1	11 3.7	295 100.0
	上記の複合家族	2 33.3	1 16.7	3 50.0	0	6 100.0
安定 家族	婦令40才以下 長子11才以上	9 23.1	8 20.5	21 53.8	1 2.6	39 100.0
	婦令41才~60才 子なし	4 36.4	3 27.3	4 36.4	0	11 100.0
	" 子あり	12 21.4	14 25.0	29 51.8	1 1.8	56 100.0
	上記の複合家族	0	0	0	0	0
衰退 家族	婦令61才以上	1 100.0	0	0	0	1 100.0
	不 明 等	9 25.0	14 38.9	11 30.6	2 5.6	36 100.0
合 計		105 21.6	148 30.5	217 44.7	15 3.1	485 100.0

表 4-12 くつろぐ室の床様式の理想(団地)

家 族 周 期		和	洋	不明	合計
成長 家族	婦令40才以下 子なし	18 % 43.9	22 53.7	1 2.4	41 100.0
	" 長子10才以下	117 39.7	167 56.6	11 3.7	295 100.0
	上記の複合家族	4 66.7	2 33.3	0	6 100.0
安定 家族	婦令40才以下 長子11才以上	16 41.0	23 59.0	0	39 100.0
	婦令41才~60才 子なし	6 54.5	5 45.5	0	11 100.0
	" 子あり	24 42.9	29 51.8	4 5.4	56 100.0
	上記の複合家族	0	0	0	0
衰退 家族	婦令61才以上	1 100.0	0	0	1 100.0
	不 明 等	13 36.1	18 50.0	5 13.9	36 100.0
合 計		199 41.0	266 54.8	20 4.1	485 100.0

型に少ないこと、団地では、型に限らず、和風や和洋折衷が多いことが分かる。

次に家族周期との対応では、特に明瞭な傾向はないが、成長家族の一部に、平均よりやや強い和風志向があるかもしれない。

「しつらえ」は、いわゆる床様式ではなく、室内に持ち込んだ家具や装飾を聞いたことに対する回答であるので、床様式と比較して、居住者の好みがよく反映しているものである。もちろん、室計画のいかんによっては、必ずしもそうではないが、戸建と団地での回答の質的な差は、少しは縮まっていると考えられる。

現在の「しつらえ」に対し、床様式の理想では、洋室が戸建で78%、団地55%、和室が、戸建で18%、

団地41%である。前項で見たように、理想が、現住居のあり方に影響を受けて引きずられることが、床様式においても観察される。

理想と家族周期との関係では、特に明瞭な傾向はないが、団地の複合成長家族、戸建の成長家族で、和室のくつろぐ室の評価が高いように見えるが、例数が少なく断定できない。和室を理想とした家族においても、実態の床様式は、洋室が多く、関係が不明瞭である。

次に、食事室においては、戸建・団地とも、洋室を理想とする傾向が、90%近くを占めている。現実には洋室が90%以上であることから、特に問題になる点はない。

食事室の理想と家族周期の関係では、高年齢の子なし安定家族で、和室を理想とする傾向が目立つ。これは、

表4-13 食事室の床様式の理想（戸建）

家族周期		和	洋	不明	合計
成長家族	婦令40才以下 子なし	0	5 % 83.3	1 16.7	6 100.0
	" 長子10才以下	3 2.3	122 94.6	4 3.1	129 100.0
	上記の複合家族	0	1 00.0	0	1 100.0
安定家族	婦令40才以下 長子11才以上	3 5.5	50 90.9	2 3.6	55 100.0
	婦令41才~60才 子なし	1 12.5	5 62.5	2 25.0	8 100.0
	" 子あり	4 5.1	73 93.6	1 1.3	78 100.0
	上記の複合家族	0	0	0	0
衰退家族	婦令61才以上	1 20.0	3 60.0	1 20.0	5 100.0
	不明等	4 7.0	45 78.9	8 14.0	57 100.0
合計		16 4.7	304 89.7	19 5.6	339 100.0

表4-14 食事室の床様式の理想（団地）

家族周期		和	洋	不明	合計
成長家族	婦令40才以下 子なし	3 % 7.3	38 92.7	0	41 100.0
	" 長子10才以下	8 9.5	261 88.5	6 2.0	295 100.0
	上記の複合家族	1 16.7	5 83.3	0	6 100.0
安定家族	婦令40才以下 長子11才以上	3 7.7	36 92.3	0	39 100.0
	婦令41才~60才 子なし	4 36.4	7 63.6	0	11 100.0
	" 子あり	7 12.5	48 85.7	1 1.8	56 100.0
	上記の複合家族	0	0	0	0
衰退家族	婦令61才以上	0	1 100.0	0	1 100.0
	不明等	2 5.6	31 86.1	3 8.3	36 100.0
合計		48 9.9	427 88.0	10 2.1	485 100.0

高齢層でのタタミ室志向残存とする予想に対応している。

接客室では、戸建で、和 62 %・洋 32 %、団地で和 53 %・洋 41 %が理想としている。ここでも、現在の住居のあり方に引きつられる傾向が見られ、戸建と団地の差に現われている。家族周期との間には、目立った関係はなかったが、住戸の平面型と理想の床様式との間に一定の関係が見られた。戸建の和室を理想とするものの割合が、各室廊下アクセス型の現住居でもっとも高く、Lホール型、DKホール型、続間型の順に低くなることである。これは、もっとも近代的な、個室や独立した部屋で構成される廊下アクセス型で、和室の接客室が、理想とされ、逆に、続間型のような伝統的部分を残した住

表4-15 接客の床様式の理想（戸建）

	和	洋	不明	合計
廊下アクセス型	127 % 66.5	57 29.8	7 3.7	191 100.0
Lホール型	32 59.3	19 35.2	3 5.6	54 100.0
DKホール型	7 46.7	7 46.7	1 6.7	15 100.0
続間型	4 40.0	4 40.0	2 20.0	10 100.0
その他				
不明	30 55.6	19 35.2	5 9.3	54 100.0
合計	210 61.9	108 31.9	21 6.2	339 100.0

表4-16 接客の床様式の理想（団地）

	和	洋	不明	合計
廊下アクセス型	48 % 53.3	36 40.0	6 6.7	90 100.0
Lホール型				
DKホール型	211 53.4	161 40.8	23 5.8	395 100.0
続間型				
その他				
不明				
合計	259 53.4	197 40.6	29 6.0	485 100.0

宅型では、必ずしもそうではないという興味深い関係となっている。

### 3 平面型の理想

#### 1) 住戸の平面の実態

戸建では、約 70 %が各室廊下アクセス型で、20 % Lホール型、6 % DKホール型、4 %が続間型である。団地では、同一の平面型を供給するので、廊下アクセス型とDKホール型しかなく、それぞれ 19 %、18 %であるが、調査が無作為抽出でないので意味がない。

住戸の室数は戸建で、3,4,5室を中心に広範囲に及んでいる。（室数は、寝室、居間、書斎、食堂、ダイニング・キッチンを含むもので、風呂、便所、廊下などを除いたものである。居住者の回答そのままであるので、必ずしも正確ではない）

#### 2) 平面型の好み

上記のような質問によって、各室ごとの問題でなく、住戸平面全体の好みについて傾向を探ろうとした。

間取りAは、いわゆる各室廊下アクセス型（1階）の平面例、間取りBは、Lホール型（1階）の平面例、間取りCは、続間型の平面例である。

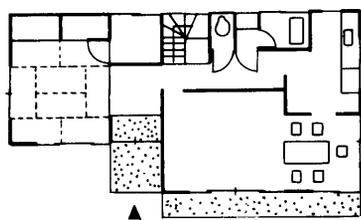
表4-17 平面類型と室数(戸建)

	1室	2	3	4	5	6~	不明	合計
廊下アクセス型	2 1.0	1 0.5	28 14.7	112 50.7	42 22.0	5 2.6	1 0.5	191 % 100.0
Lホール型	1 1.9	1 1.9	8 14.8	28 51.9	11 20.4	3 5.6	2 3.7	54 100.0
DKホール型			5 33.3	6 40.0	2 13.3	2 13.3		15 100.0
続間型			1 10.0	6 60.0	3 30.0			10 100.0
その他							2	2
不明		1 1.9	6 11.1	31 57.4	6 11.1	3 5.6	7	54 100.0
合計	3 0.9	3 0.9	51 15.0	187 55.2	67 19.8	16 4.7	12	339 100.0

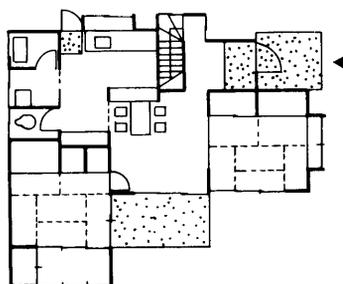
表4-18 平面類型と室数(団地)

	1室	2	3	4	5	6~	不明	合計
廊下アクセス型		86 95.6					4 4.4	90 % 100.0
Lホール型								
DKホール型	96 24.3	183 46.3	81 20.5	10 2.5			2 0.5	395 100.0
続間型								
その他								
不明							23	23
合計	96 19.8	269 55.5	81 16.7	10 2.1			29 5.9	485 100.0

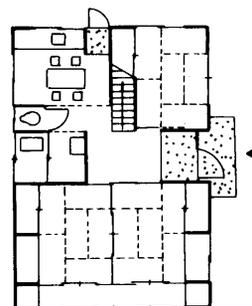
北



<間取りA>



<間取りB>



<間取りC>

表4-19 上の間取りのうちどれが最も好ましいとお考えですか。1つ選んでABCでお答え下さい。

	団地 回答総数(486) 無回答(43)					戸建 回答総数(338) 無回答(23)					
	都3DK (賃)	公2DK (賃)	公3DK (賃)	公2DK (分)	公3LDK (分)	団地計	平山台	北野台	八王子	滝山台	戸建計
間取りA	19 % 25.0	35 38.5	25 28.1	30 31.6	39 42.4	148 33.4	54 65.1	69 76.7	60 66.7	34 65.4	217 68.9
間取りB	46 60.5	45 49.5	44 49.4	57 60.0	47 51.1	239 54.0	24 28.9	16 17.8	20 22.2	11 21.2	71 22.5
間取りC	11 14.5	11 12.1	20 22.5	8 8.4	6 6.5	56 12.6	5 6.0	5 5.6	10 11.1	7 13.5	27 8.6

表4-20 <間取りA>次にあげた間取りAのプランの特長の中で好ましいとお考えのものすべてにO印をつけて下さい。

団地 回答総数(486)

戸建 回答総数(338)

	都3DK (賃)	公2DK (賃)	公3DK (賃)	公2DK (分)	公3LDK (分)	団地計	平山台	北野台	八王子	滝山台	戸建計
イ、各部屋に直接廊下から出入りできる。	53 % 58.9	65 66.3	44 45.4	71 68.3	49 50.5	282 58.0	71 86.6	78 92.9	77 96.3	36 87.8	262 91.3
ロ、独立した和室がある。	45 50.0	46 46.9	41 42.3	43 41.3	53 54.6	228 46.9	58 70.7	67 79.8	54 67.5	29 70.7	208 72.5
ハ、洋風の居間がある。	28 31.1	23 23.5	30 30.9	27 26.0	27 27.8	135 27.8	43 52.4	52 61.9	41 51.3	17 41.5	153 53.3
ニ、居間が広く使える。	42 46.7	36 36.7	45 46.3	62 59.6	56 57.7	241 49.6	47 57.3	54 64.3	54 67.5	27 65.9	182 63.4
ホ、居間と台所が別である。	32 35.6	39 39.8	45 46.4	58 55.8	55 56.7	229 47.1	58 70.7	60 71.4	53 66.3	25 61.0	196 68.3
ヘ、食事室と台所が別である。	19 21.1	19 19.4	32 33.0	28 26.9	31 32.0	129 26.5	32 39.0	52 61.9	30 37.5	16 39.0	130 45.3
ト、台所が東に向いている。	19 21.1	28 28.6	28 28.9	24 23.1	30 30.9	129 26.5	40 48.8	46 54.8	40 50.0	21 51.2	147 51.2

間取りA, Bは、いわば近代的な平面で、間取りCは続間を含んでおり、伝統的な構成を含んだ平面である。強いて、AとBを区別すれば、Bのほうが洋室のホールに、和室を直接続けるということで、折衷的な感じがあるとすることもできる。

このような質問形式は、間取りの他の特色が着目されたり、あるいは間取りそのものが、充分理解されないことから、質問の目的が達せられない惧れがある。そこで、まず、間取りA,B,Cのランダムに列挙した特徴を評価させ、その上で、総合的にA,B,Cを比較させ検証することにした。各間取りの特徴評価は、以下の表に示すような結果となった。

それぞれの質問の選択肢のうち、最初の(イ)において、こちら側で意図した特徴を述べてある。これらの回答のうち、イの選択肢への回答率、他の選択肢とイとの回答率の差に着目する。

最初の選択肢への回答率は、間取りAでは満足のいくものであるが、間取りB, Cでは、他の選択肢と比較しても低い。間取りCは、イと意味が異なるが、和風のしつらえである縁側への回答が充分あり、Cの伝統的性格を訴えることができる程度成功した。これらに比し、間取

りBは、Lホールの特徴に代替するものがなく、あいまいになっている。イの表現に問題があったのかもしれない。間取りBは、しかしながら、AとCとの中間であるので、近代的間取りと伝統の間取りの中間としてもとと若干あいまいな面もあったものである。

十分に、間取りA,B,Cの特徴が、伝えきらないという不明瞭さはあるにしても、最後のA,B,Cの選択においては、やや救われる点がある。というのは、A,Cの選択者はともかく、Bの選択者においても、Bにまったく否定的であれば、Bを選択することはないわけで、選択結果は、やはりA,B,Cへの好みを表現するものになっているからである。

最終結果は、表4-19に示した。戸建では、Aを70%前後、B 20%、C 10%、団地はA 33%、B 55%、C 12%である。ここでも、現住居にひきつられ、特に、団地でのBの選択傾向は、特徴的である。戸建のうち、北野台は、他よりもAの選択傾向が高い。団地のうち、分譲3LDK居住者では、戸建居住者に近い分布となっている。

先ほど述べた、くつろぐ室のしつらえとA,B,Cの選択の関係を見ると、戸建、団地とも間取りAは、洋風のし

表4-21 <間取りB>次あげた間取りBのプランの特長の中で好ましいとお考えのものすべてに○印をつけて下さい。

団地 回答総数(486)

戸建 回答総数(338)

	都3DK (賃)	公2DK (賃)	公3DK (賃)	公2DK (分)	公3LDK (分)	団地計	平山台	北野台	八王子	滝山台	戸建計
イ. 和室と洋室の続間がある。	17 18.9	17 17.3	10 10.3	17 16.3	17 17.5	78 16.0	32 39.0	28 33.3	29 36.3	17 41.5	106 36.9
ロ. 3部屋がすべて南に面している。	62 68.9	70 71.4	76 78.4	89 85.6	78 80.4	375 77.2	77 93.9	84 100.0	78 97.5	40 97.6	279 97.2
ハ. 居間が和室である。	17 18.9	14 14.3	11 11.3	15 14.4	17 17.5	74 15.2	9 11.0	6 7.1	8 10.0	9 22.0	32 11.1
ニ. 間取りの形状がL型である。	7 7.8	13 13.3	12 12.4	9 8.7	13 13.4	54 11.1	10 12.2	10 11.9	13 16.3	8 19.5	41 14.3
ホ. 居間と台所が別である。	30 33.3	30 30.6	37 38.1	43 41.3	39 40.2	179 36.8	46 56.1	55 65.5	44 55.0	19 46.3	164 57.1
ヘ. 居間と食事室が一語である。	5 5.6	8 8.2	6 6.2	9 8.7	5 5.2	33 6.8	11 13.4	10 11.9	5 6.3	5 12.2	31 10.8
ト. 広縁のある和室がある。	47 52.2	37 37.8	58 59.8	57 54.8	58 59.8	257 52.9	59 72.0	65 77.4	63 78.8	32 78.0	219 76.3

表4-22 <間取りC>次あげた間取りCのプランの特長の中で好ましいとお考えのものすべてに○印をつけて下さい。

団地 回答総数(486)

戸建 回答総数(338)

	都3DK (賃)	公2DK (賃)	公3DK (賃)	公3DK (分)	公3LDK (分)	団地計	平山台	北野台	八王子	滝山台	戸建計
イ. 和風の続間がある。	26 28.9	31 31.6	32 32.0	35 33.7	28 28.9	152 31.3	38 46.3	31 36.9	41 51.3	23 56.1	133 46.3
ロ. 開放的な間取り。	13 14.4	16 16.3	22 22.7	14 13.4	19 19.6	84 17.3	18 22.0	15 17.9	17 21.3	14 34.1	64 22.3
ハ. 縁側がある。	62 68.9	38 38.8	48 49.5	36 34.6	45 46.4	209 43.0	40 48.8	53 63.1	48 60.0	22 53.7	163 56.8
ニ. 間取りの形状に凸凹がない。	11 12.2	10 10.2	11 11.3	18 17.3	14 14.4	64 13.2	16 19.5	12 14.3	20 25.0	8 19.5	56 19.5
ホ. 居間と台所が別である。	31 34.4	23 23.5	31 32.0	33 31.7	35 36.2	159 32.7	40 48.8	44 52.4	43 53.8	17 41.5	144 50.2
ヘ. 食事室と台所が一緒である。	33 36.7	25 25.5	27 27.8	24 23.1	25 25.8	134 27.6	23 28.0	15 17.9	23 28.8	11 26.8	72 25.1

つらえの居住者が多く、間取りBも同様だが、和・洋半々の折衷のつらえの居住者が加わる。間取りCは、やはり、和風のつらえの居住者が多くなる。

家族周期とABCの選択を見ると、特に戸建において、成長家族から安定家族に移るにつれて、AからB、Cへの分布の移行があるように思われるが、サンプル数がないため確言できない。

ABCの選択と現住居の平面型の分布は、良く似ており、続間型を除けば、ほとんど同じである。この事は、

表4-23 くつろぐ室のつらえとABCの選択（戸建）

	A	B	C	不明	合計
和 風	9 4.2	8 11.3	4 15.4	2	23 6.9
和・洋半々	34 15.8	14 19.7	6 23.1	7	61 18.4
洋 風	172 80.0	49 69.0	16 61.5	11	248 74.7
不 明	3 -	0 -	1 -	3	7 -
合 計	218 100.0	71 100.0	27 100.0	23 100.0	339 100.0

表4-24 くつろぐ室のつらえとABCの選択（団地）

	A	B	C	不明	合計
和 風	22 15.1	48 20.8	20 37.7	15	105 22.3
和・洋半々	41 28.1	79 34.2	16 30.1	12	148 31.5
洋 風	83 56.8	104 45.0	17 32.1	13	217 46.1
不 明	1 -	8 -	3 -	3	55 -
合 計	147 100.0	239 100.0	56 100.0	43 100.0	485 100.0

表4-25 ABCの選択（戸建）

家族周期	A	B	C	不明	合計
成長家族 婦令40才以下 子なし	5 83.3	0	1 16.7	0	6 100.0
” 長子10才以下	83 64.3	26 20.2	13 10.1	7 5.4	129 100.0
上記の複合家族	0	1 100.0	0	0	1 100.0
安定家族 婦令40才以下 長子11才以上	40 72.7	12 21.8	1 1.8	2 3.6	55 100.0
婦令41才~60才 子なし	4 50.0	2 25.0	2 25.0	0	8 100.0
” 子あり	46 59.0	18 23.1	6 7.7	8 10.3	78 100.0
上記の複合家族	0	0	0	0	0
衰退家族 婦令61才以上	4 80.0	0	1 20.0	0	5 100.0
不 明 等	36 63.2	12 21.1	3 5.3	6 10.5	57 100.0
合 計	218 64.3	71 20.9	27 8.0	23 6.8	339 100.0

ABCの選択の判断がかなり正確に平面型の理想を表わしていることを示している。これから類推すると、続間型の要求もあるということになる。戸建住宅のように、

表4-26 ABCの選択（団地）

家族周期	A	B	C	不明	合計
成長家族 婦令40才以下 子なし	15 36.6	24 58.5	0	2 4.9	41 100.0
” 長子10才以下	95 32.2	134 45.4	44 14.9	22 7.5	295 100.0
上記の複合家族	1 16.7	3 50.0	1 16.7	1 16.7	6 100.0
安定家族 婦令40才以下 長子11才以上	9 23.1	24 61.5	4 10.3	2 5.1	39 100.0
婦令41才~60才 子なし	5 45.5	4 36.4	1 9.1	1 9.1	11 100.0
” 子あり	13 23.2	33 58.9	4 7.1	6 10.7	56 100.0
上記の複合家族	0	0	0	0	0
衰退家族 婦令61才以上	0	1 100.0	0	0	1 100.0
不 明 等	9 25.0	16 44.4	2 5.6	9 25.0	36 100.0
合 計	147 30.3	239 49.3	56 11.5	43 8.9	485 100.0

表4-27 平面型とABCの選択（戸建）

	A	B	C	不明	合計
廊下アクセス型	127 70.2	39 21.5	15 8.3	10 -	191 100.0
L・ホール型	32 62.7	15 29.4	4 7.8	3 -	54 100.0
DKホール型	14 93.3	1 6.7	0 0.0	0 -	15 100.0
続 間 型	5 50.0	3 30.0	2 20.0	0 -	10 100.0
そ の 他	6	5	2	2	15
不 明	34	8	4	8	54
合 計	218 69.0	71 22.5	27 8.5	23 -	339 100.0

表4-28 平面型とABCの選択（団地）

	A	B	C	不明	合計
廊下アクセス型	19 25.0	46 60.5	11 14.5	14 -	90 100.0
L・ホール型					
DKホール型	128 35.0	193 52.7	45 12.3	29 -	395 100.0
続 間 型					
そ の 他					
不 明					
合 計	147 33.3	239 54.1	56 12.7	43 -	485 100.0

居住者の要求が反映する住宅では、統間型が求められるということである。

#### 4. 統間型住宅の実態

##### 1) 位置付

秋田県の独立住宅（都市部，昭和 50 年）の調査によると，以下の特徴があることが分かった。

- ・敷地面積——340㎡以上が全体の 1/3 を占め，平均では，433.5㎡である。
- ・延床面積——130㎡以上が全体の 1/2 以上を占め，平均では130.6㎡である。
- ・居住人数——3人以下が少なく，5人以上が多い。
- ・世帯の型——複合家族が，全体の 1/3 を占めているのが目立つ。
- ・工法・構造——在来工法，木造がほとんどである。
- ・居室数——5～6室が多い。
- ・全居室の広さ——平均6～8帖であるが，8帖が37%
- ・公室群の構成——DKタイプ76%と高率で，他地域と差がない。
- ・居間の和・洋の別——洋室の方が多い。
- ・居間と統間の関係——統間が居間となる比率が減り，居間として使われなくなっている。

以上が，平均的なイメージだが，住戸型の分布を見ると，15%の各室廊下アクセス型，4%のLホール型，5.5%のDKホール型に対比して，60%に及ぶ統間型が見られる。さらに伝統的な田舎住宅型があり，他地域より多く存在する。

##### 2) 調査対象の属性

秋田県の平均住戸の平面型である統間型について，既調査対象の中から協力の得られた12戸に訪問インタビュー調査（郵送アンケート併用）を行なった。表4-30に示すように，12戸の平面型はもちろん統間型であるがそのうち3戸（A, C, I）は，統間型ループである。

延床面積は，最大155.9㎡，最小92.3㎡，平均127.7㎡である。これは，秋田県の平均130.6㎡とよく対応する。居間を含む全居室数は5.4室であり，これも平均5～6室に一致している。世帯構成は，4人が最も多く（7戸），平均は4.1人で，構成員の平均年齢は，世帯主44.6歳，妻39.5歳，長子15.6歳となっていて，2世代家族が多く（10戸），3世代家族は2戸であった。これらのことから，12戸の住宅は秋田県において，平均的なものであることが分かる。

##### 2) 住居の特徴としつらえ

###### i 統間の配列

統間には，南北軸に配列されたものと，東西軸に配列されたものがある。南北軸に配列されたものの中には，統間2室が独立して玄関脇にとられている形がみられる。この場合，玄関は，南にとられている。また統間が，公

室として使われている場合には，主動線がループ状の平面型となっているものが多い。

###### ii 統間の広さ

統間を構成する2室の広さは，8帖が一般的であり，住宅の規模が小さくなると統間の広さも縮小する。住宅の規模に余裕があると，統間の広さも大きくなり，縁側が付け加わる。

###### iii 統間のしつらえ

統間は，2室とも和室で構成されていて，必ず片方一室には床の間があり，格式の高い部屋となっている。もう一方の部屋は，床の間の分だけ収納（押入）がとられている場合が多い。

床の間などの座敷飾りのある部屋は，接客を意識したしつらえであると思われる。

表4-29 家族の年齢構成

内 容	戸
10才以上，40才未満の構成員	0
10才未満と40才未満の構成員	3
10才未満と40才以上60才未満を含む構成員	1
10才未満と60才以上のいる構成員	0
10才以上と40才以上60才未満も含む構成員	5
10才以上と60才以上のいる構成員	3

表4-30 統間型住宅の形態的特徴およびしつらえ

住戸	平面型	統配間の列	統間の広さ		公の室構群成	居和間の洋	全居室数	寝室数	家族人数	延床面積 ㎡
			◎	○						
A	ループ	東西	8	6	L・DK	和*	5	2	4	141.8
B	統間	南北	8	4.5	L・DK	洋	5	1	4	92.3
C	ループ	東西	8	8	L・DK	和*	5	1	4	124.7
D	統間	南北	6	6	L・DK	洋	5	▲2	4	116.7
E	統間	南北	8	8	L・DK	洋	6	2	4	140.9
F	統間	南北	8	6	L・DK	洋	5	▲1	2	113.4
G	統間	南北	8	8	L・DK	和	6	1	3	133.7
H	統間	東西	8	8	L・DK	洋	7	▲5	6	145.8
I	ループ	西北	6	8	L・DK	和*	5	▲3	4	126.0
J	統間	西北	8	8	L・DK	和	6	▲3	5	155.9
K	統間	東西	8	6	L・DK	和	4	▲3	4	106.9
L	統間	東西	8	8	L・DK	和	6	4	5	134.5
平均			8	7			5.4	2.2	4	127.7

注 ◎ 統間2室のうちで床の間などを配した格式の高い部屋  
○ もう一方の部屋 \* 統間の一室  
▲ 統間の一室を含む

#### IV 続間とL・D・Kの関係

12戸中、8戸が続間と別にL D Kなどの公室群を持っている。そうでない4戸においても、Lのみが続間の1室と重複していて、続間との分離の意志をうかがうことができる。玄関との関係では、多くが続間との関係が優先されている。そうでない場合も、続間とL D Kの間に玄関がとられているものが多い。

こうした関係は、接客的な続間と日常生活のための公室を分けることと、続間へ、格式ある動線を配慮したものであろう。

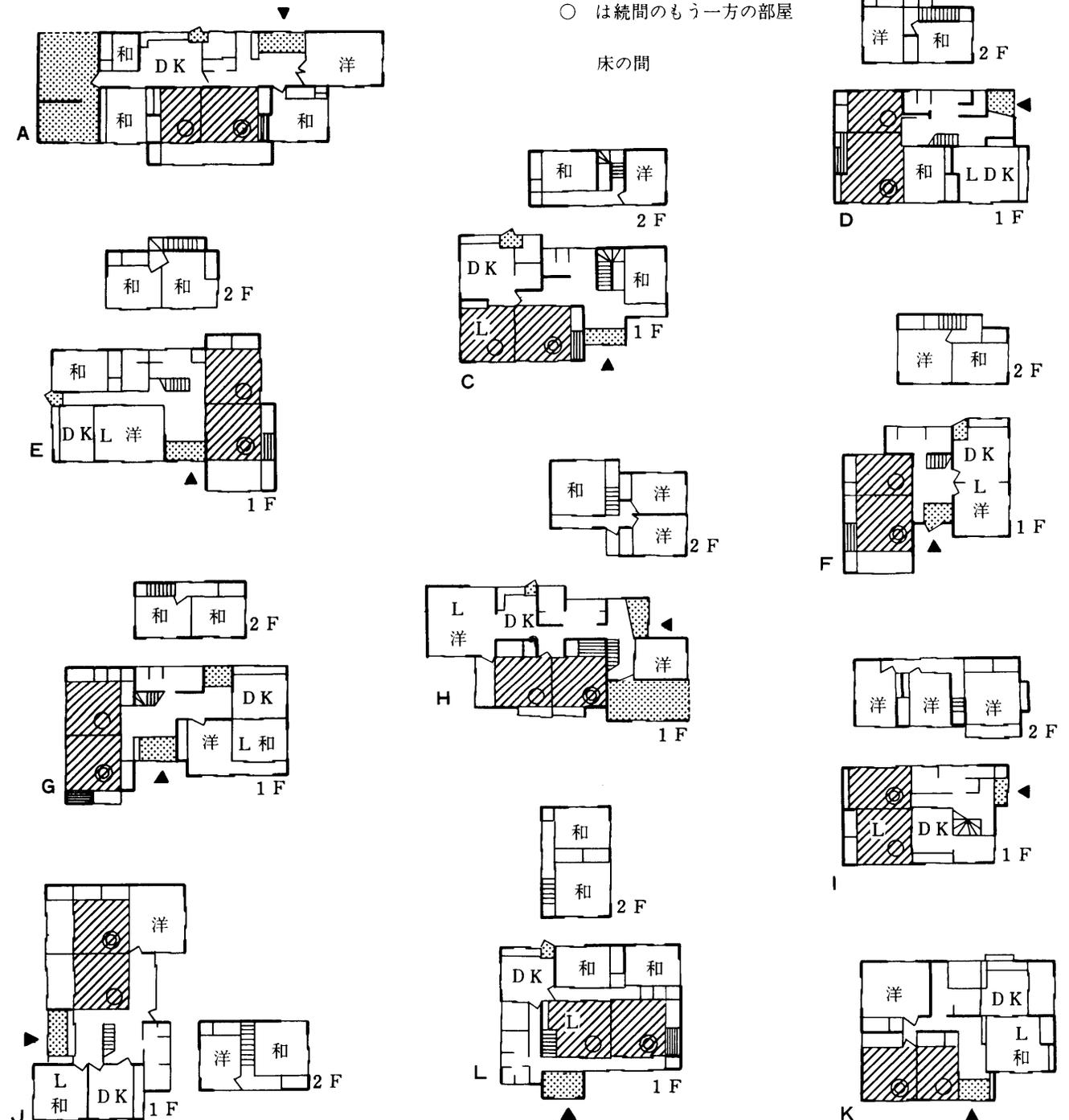


図4-1 平面図(実例)

## V 他の伝統的な特徴

東北の民家に見られる詳細な伝統的特徴は、ほとんど観察することはできない。

しかし、広間的な玄関のつくり、仏壇・神棚のしつらえなど、伝統的なつくりが残されている。

### 3) 住い方

#### i 統間と公室の使われ方

居間として使われる統間は、既に見たように4戸で観察される。他の8戸では、別に居間がある。前者の4戸のうち3戸(A, C, I)は、ループ型の平面型であるから必ずしも純粋な統間とはいえず、圧縮されたものである。ループ型でない統間型では、統間は居間にほとんど使われれないと言える。これは、秋田県の統間の特徴であり、居間の洋室化をもたらす要因でもある。

次に統間を、格式の高い室◎ともう一方の室○に分けて考えると、居間になる統間はすべて○にとられる。

#### ii 統間と私室の使われ方

統間が、私室(寝室)として使われるのは、6戸で、半分である。この場合4戸が統間○を寝室としている。統間◎を寝室として使用している住戸は、家族人数が多かったり、居室の数が少ない場合である。

特に統間◎の使われ方をみてみると、居間にも寝室にも使われていない場合がほとんどで、日常はあまり使われない部屋(余室)となっていることがわかる。住戸によっては、統間○も余室となっているものもあるが、統間2室を除いて寝室が家族人数分(夫婦は1室とする)確保できるか否かを考えると、将来成長した子供が個室を持つ時は、統間○が寝室となる(夫婦寝室が移動する)ことが予想できる。このことは、12戸の居室数の平均5.4室、居住人数4.0人であることからしても、容易に理解できる。

#### iii 接客空間としての統間

接客の仕方をみると、ほとんどの住戸で親しい客と、あらたまった客とを分けて別の部屋に通している。あらたまって客を通す部屋は、ほとんど統間◎で、親しい客は居間や統間○にも及ぶ。

## 4) 在室時間量

ある普通の1日の世帯主、妻、長子について、どの部屋にどの位の時間滞在していたかを調べてた。

図4-2は、15分以上その部屋に滞っていたことが基準であり、仕事、学校などの外出時間、浴室、便所、テラスなどの時間は含まず、30分単位で表わしたものである。その結果、最も長く滞在する部屋は寝室であることは当然だが、それ以外では、世帯主が居間、妻が台所とその近辺が多い。子供は年齢により異なり、一概に傾向は見出せない。

統間における在室時間量をみてみると、統間が、居間・

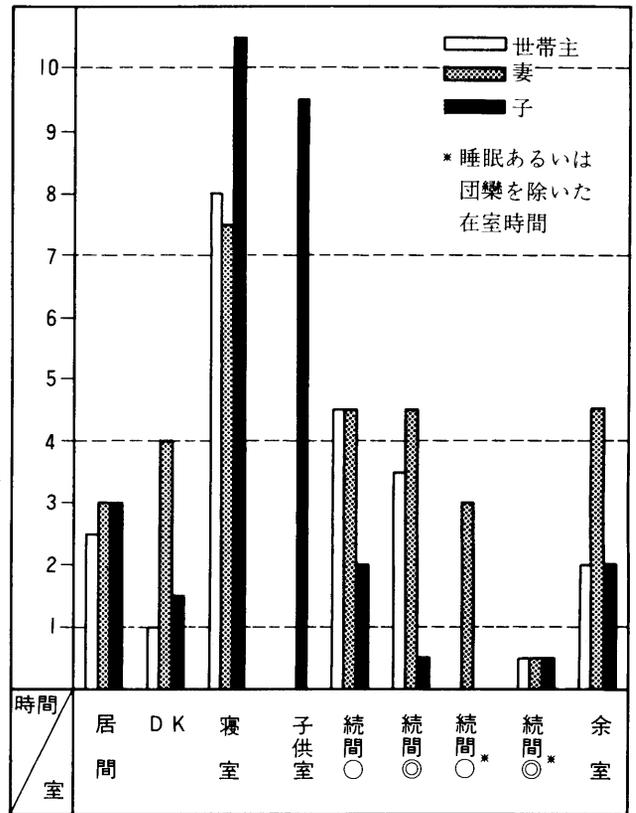


図4-2 在室時間量 (1人当たり)

表4-31 統間の採用理由

・祭り、集会などで客が大勢集まることが多い	6
・仏祝儀などで親類が集まる人が多い	3
・接客空間として、和風の格調高い部屋が必要	1
・以前の家がそうだったから	1
・特になし	1

寝室として用いられない場合は、平日に滞在することはほとんどなく、統間が日常的に用いられないことが分かる。

## 5) 統間の採用理由

統間がどういう理由で採用されたかという、祭り、集会などで、人が多勢集まる機会が多く、広く使える空間を必要とする。また接客空間としてだけでなく、仏事、祝儀などの際にも必要である。これらが主な理由である。このように冠婚葬祭や寄合いというものを、各居住者の住宅の中で消化していくといった伝統的慣習が、まだ残っているからこそ、統間型住宅が必要とされるのである。

## 6) ま と め

以上の分析・考察を要約すると以下となる。

a) 床様式における和室の残存は、接客室・主寝室を

除き、あまり期待できない。

- b) 現在の床様式は、住居規模に制約され、DKホール型や小規模住居では、洋風化が抑えられている。
- c) 理想の床様式は、やはり現住居のあり方に引きづられることが見られ、団地の方が、和風志向が相対的に多いが、実質は、洋室化していくのだろう。
- d) 家族周期と床様式との対応では、主寝室のみ世代があがるほど和風を好むが、他の室は、洋風化するか、和洋比率一定である。
- e) 伝統的な和室が再評価されている兆候はほとんどなく、若い、乳幼児のいる家族でのタタミ志向があるようにも見えるが断定できない。
- f) 間取り全体の伝統性（続間型）への志向については、現住居の平面型と同種の型を評価する傾向があるが、一定程度の続間型への評価が見られ、必ずしも床様式の理想とは対応しない結果となった。
- g) 近代的な平面型と和室の接客室、続間型における近代的なL・D・Kの併設など、和・洋の対比的なあり方が、志向されている。
- h) 住宅の近代化は、洋風化でもあるが、内部機能の外部化であると云われる。秋田の続間型は、L・D・Kや寝室などの実際部分は洋風化しているが、必ずしも接客的な部分など外部化を経験していない住宅である。
- i) 従って、外部化を助げる条件が維持されるならば、今後共、残っていく類型である。より都市・住宅問題のきびしい条件のもとでは、相対的に規模の大きい続間型は困難に直面する。また人々の住宅を通しての交遊など接客行為の意味が減少する際も、同様な事態であろう。

## § 5. 残された問題

### 1 住宅地のレベルでの住様式

住様式を、住居の部分、部屋、間取りと、小さいところから大きく、総合的なところまで、住い方研究の立場から見てきた。しかし、住様式について、住生活との対応という点から、住宅地という範囲での住生活との関連を問題にする必要はないのだろうか。

既に、多くの服部研究室での報告で示したように、独立住宅の研究は、独立住宅の計画そのものへの還元のためだけでなく、集合住宅での住居の問題への示唆を見出すためである。集合住宅での集合化の方法では、住宅地のレベルでの住様式が、肝心である。独立住宅地では、どのような住様式が存在するのだろうか。眼を、居住者の生活領域とか、住居のグルーピングなどの既成のものに向けることは、独立住宅の自然で、主体的な住宅地形成のプロセスから、必ずしも有効でない。新しい着眼が必

要である。独立住宅地の住様式の真実を記述する方法は、まったく新しいものではないだろうか。

もちろん、独立住宅地においても、その造成計画、敷地の区画計画の制約、生産・供給の条件も大きく必ずしも、すべて自然な住宅選択がされているわけではない。しかし、各住居が、与えられたままで固定的にあるのではなく、セルフ・エイドを許すことが、いわゆるマンションや団地の集合住宅とは異なっている。そのような点の自由からくる住宅地形成のプロセスに、住宅地レベルでの住様式が存在するのではないだろうか。

固定した集合化でなく、自由な集合化の方法を模索するためには、今、新しい住宅地レベルでの住様式の発見が期待される。

### 2 その他の問題

住居の平面型、各室のあり方および各室の規模の理想、和室の将来、続間型の動向などについて、家族周期との対応、現住居の制約を見てきた。

最初に見たように、多様性の中の新しい原理として、家族の条件と住居との関係を期待したが、必ずしも明解でなく、かすかに、若い家族で、公的行為（だんらん、食事、接客）が重複し、高年の家族で、分離しているということが分かった程度である。

伝統の再評価に関しては、主寝室に関する常識的結論しかなく、研究が不十分であったのかと反省している。しかし、現住居の制約は、大きく、DK型や同種住戸平面型への志向は、問題を感じさせる。

今後、明確で、より新しい住様式への流れが、生ずるかどうかは、もしこの研究がリアリティを持っているとすれば、ますます現住居に引きづられた多様性があるのみで、何か外的な変化でもなければ、このままであろう。研究としては、より見通しを深めることで、事実に関心を越されないようにしたい。

### 参考文献

- 服部岑生：都市住宅の実態とその将来像／住宅 1979.3
- 服部岑生：独立個人住宅の平面型の類型化／建築技術、1979.11
- 千葉大学服部研究室：住要求から見た独立住宅の類型化に関する研究／新住宅普及会、1977
- 服部岑生：Descriptive Model of Architectural Space／千葉大学工学部研究報告、第31巻、第59号
- 服部岑生・大久保誠・他：空間の記号化と標識の選定／日本建築学会大会、昭和50年10月
- 服部岑生・大久保誠・他：住生活の記号化／日本建築学会大会、昭和50年10月
- 服部岑生・大久保誠・他：住宅の平均像の設計について

／日本建築学会大会，昭和50年10月  
 服部岑生・鈴木孝道・他：住宅平面の評価方法および類型と特性／日本建築学会大会，昭和51年10月  
 服部岑生・鈴木孝道・他：平面計画の特性の実態／日本建築学会大会，昭和51年10月  
 服部岑生・鈴木孝道・他：住宅平面類型の感度の検討／日本建築学会大会，昭和51年10月  
 服部岑生・鈴木孝道・他：住い方研究と類型／日本建築学会大会，昭和52年10月  
 服部岑生・鈴木孝道・他：住宅・居住者の特性（住宅金融公庫資金利用独立住宅の住い方調査 千葉県）／日本建築学会大会，昭和52年10月  
 服部岑生・鈴木孝道・他：居住者のライフ・スタイル／日本建築学会大会，昭和52年10月  
 服部岑生・鈴木孝道・他：公・私室の使われ方と評価／日本建築学会大会，昭和52年10月  
 服部岑生・鈴木孝道・他：住い方とフレキシビリティ／日本建築学会大会，昭和52年10月  
 服部岑生・鈴木孝道・他：住い方とフレキシビリティ要求／日本建築学会大会，昭和52年10月  
 服部岑生・鈴木孝道・他：外部空間の使われ方と評価／日本建築学会大会，昭和52年10月  
 服部岑生・小泉仁・他：平面型の類型化／日本建築学会大会，昭和53年9月  
 服部岑生・小泉仁・他：独立住宅の住い方調査／日本建築学会大会，昭和53年9月  
 服部岑生・小泉仁・他：住意識の実態／日本建築学会大会，昭和53年9月  
 服部岑生・小泉仁・他：成長変化の計画／日本建築学会大会，昭和53年9月  
 服部岑生・小泉仁・他：住い方研究と類型（続）／日本建築学会大会，昭和53年9月  
 服部岑生・小泉仁・青木節子・魚江真理子：秋田県の続間型住宅の実態／日本建築学会関東支部大会，昭和54年7月  
 服部岑生・魚江真理子・小泉仁：公共分譲住宅における居間の使われ方／日本建築学会関東支部大会，昭和54年7月  
 服部岑生・太田光紀・青木光之：集合住宅の視覚的個性／日本建築学会関東支部大会，昭和55年7月  
 服部岑生・太田光紀：プランタイプと住戸選択傾向／日本建築学会関東支部大会，昭和55年7月

<研究組織>

研究主査	服部岑生（千葉大学）
委員	魚江真理子（ 〃 ）
	青木光之（ 〃 ）
	鈴木孝道（ 〃 ）
	青木節子（総設計）
	中山茂樹（千葉大学）